
恋する乙女は悪魔っ子！？

三月語

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する乙女は悪魔っ子！？

【Nコード】

N8224X

【作者名】

三月語

【あらすじ】

何処にでも居そうな普通な、しかし異性が苦手な少年、榊敏豪。

彼が容姿端麗・優秀な少女の、口外できない秘密を知った時、彼の学園生活は波乱に満ちたものとなった・・・

初の一次です！至らないところも多々あると思いますが宜しくお願いいたします！指摘等ありましたら感想でござ。

そのいちっ！ 助けた女の子は・・・（前書き）

この物語はフィクションです。実在の人物、団体とは一切関係がありません。

初一次です。見苦しいところもあると思いますが、そこはご了承ください。

後、今までとは書き方を変えております。私の「二次」を見ていた人にとっては『代筆？』と思われるかもしれませんが、ちゃんと自分で書いてます。

そのいちっ！ 助けた女の子は・・・

・・・一体何がどうしたらこんなことになるんだ・・・？

目の前には学校一の美少女って言われる代永がいる。・・・苦手な異性が。

・・・何で俺がこんなことしてんだ・・・？

）朝）

「でき、沢木のやつボール踏んで一回転したんだぜ？」

「バカじゃね？ってことはよ、着地まできっちりこなしたのか？」

「当然！満場一致で10点あげたからな」

「10点10点10点10点……ってか？そりゃ俺も見たかったぜ……」

朝、歩いて登校する二人の男子。片方は俺、榊敏豪。隣にいるのは俺の……悪友？の桐生一樹。

昨日、一樹の所属しているサッカー部で起きた面白出来事について話していたわけで。

「そっちはどうだ？ちったあ楽しめる部活だったか？」

「全然。パソコンを使うと言うよりどっか走り回るのがメイン、って感じ。運動部かよって」

「なんでコンピ部が走り回るんだよ・・・」

「部活の写真撮影だってよ。学校のHPの部活動紹介に使うんだってさ。まったく、いい迷惑だよ・・・」

で、ちよつと歩いて行ったら・・・

「・・・お」

「どうした？」

「あれ見るよ。うわ、間近で見たの初めて見た」

顎で示された方を見たら・・・女子？

「なんだよ、いつもの癖か・・・」

「癖ってなんだよ癖って！つかあの子代永じゃん！学校一の美人って言われてる代永咲夜華じゃん！やべ、マジ可愛い・・・」

「・・・たく、どうせ鼻の下伸ばしてたりするんだろ？お前の変態癖って何とかなんないものかねえ？」

「・・・たくよお、お前は・・・ってそう言えばお前女嫌いだったんだっけ」

「そっだよ、悪いか？」

「・・・悪い、すっかり忘れてた。ホント悪い」

・・・俺は過去・・・小5の頃に女子に思いつきし弄られてから女

子嫌いになった。今もまだ女子に近づきたくもない。それくらい毛嫌いしている。

「ま、お前が明らかに好意を寄せているってのはよく分かってるからよ、安心しな。からかいくらいはしてやつから」

「最低だな、おい。でもそれがお前のいいところなんだよな」

お互いに色々と皮肉り合いながら教室に向かった。

そして放課後

「くっそ、野球部どこで活動してんだよ!!」

俺は部活動で校舎の外を走り回っていた。野球部が見当たらない！
！何処だっけ!？

「あつちはまだ見てなかったはず・・・ん？」

ふっと道を見たら、代永が一人歩いているのを見た。・・・親衛隊
は・・・いないみたいだな、珍しい。

「・・・何してんだ、アイツ？」

見ていると代永はふらふらとしている。・・・なんか気を抜いたら
ぶっ倒れそうな・・・

「って倒れかけてる!？」

慌てて俺は駆け・・・寄ろうとしたが体が動かない。

「・・・くそっ・・・こんな時に異性恐怖が・・・!でも・・・止
まってるれっか・・・!」

相手が異性だって関係あるか・・・！

何も考えることなく、俺は代永の元へ走り始めた。

そして今

「よ、代永！おい、大丈夫か！？」

「あ……う……」

……よかった、まだ意識はあるみたいだ……

「……一体……どうした……？」

「……が……い……」

「……？」

な、なんだ……？何て言ったんだ……？

「……血が……ほしいよ……」

そのいちっ！ 助けた女の子は・・・（後書き）

今回は秘密が明らかに。

更新は不定期ですので、更新催促はしないでください。

後、荒らしは絶対厳禁です。即時消しますので。

そのにっ！ 助けた女の子は吸血鬼！？（前書き）

第二話です。なんとなく連投してますが気にしない方向で。

今回は咲夜華の秘密が明らかになります・・・というかタイトルで分かるかと。

そのにっ！ 助けた女の子は吸血鬼！？

「……は？」

代永のやつ……何言ってるんだ？「血が欲しい」とか……吸血鬼じゃあるめえし……

「代永？おい、気は確かか？」

「血が……ほしいよぉ……」

……これ、冗談抜きで考えるべき？本当に吸血鬼って考えるべきなのか？

「……代永、鞆の中見るぞ！」

俺は代永を抱きかかえたまま、何かないかと彼女の鞆の中を開けてみた。……が、中に所謂輸血パックとかそういう類は……ない。

……マジでどうするんだよ、これ……

「……あ……」

「・・・はふう・・・お腹いっぱい・・・
また・・・またやっちゃった・・・」
「・・・あっ!?!?ま、

「・・・？」

目が覚めたら、見知らぬ天井・・・なわけなく、保健室の天井が見

えた。

「……あん時、代永に首に噛みつかれた……というか……多分ホントに血を吸われたんだと思うけど……気を失ったんだっけ……」

「あ、目が覚めた？」

「……よ、代永!？」

声が出た、と思って横を見たら代永がいた。……また噛みつかれたりすることないよな!？」

「な、何もしないよな……!？」

「その……ホントにゴメン!？」

パン!と手を合わせて代永が謝る。

「……あれ？」

「……ところで……あのさ、代永？」

「な、なに？」

「お前って……一体何者なわけ? 「血が欲しい」って言ったり首に噛みついたり……まんま吸血鬼そのものな感じだけど?」

「そ、それは……その……」

代永は言いたくなさげに「よ」に「よ」と口ごもった。

「言いたくないなら言わなくてもいいけど」

「え、えと、その・・・ね？あまり他の人に言ってほしくないんだけど・・・」

言いたくないようなことを無理して言うようにポツリ、ポツリと言いだした。

「私・・・吸血鬼なの」

「・・・は？」

「だから、私は吸血鬼なの！」

「吸血鬼ていうと・・・ヴァンパイアとかそういう類？」

「・・・うん」

「ヴァンパイア・フィリアとかじゃなくて純粹に？」

「さっきからそう言ってるよ」

最初は冗談かなんかだろうって思ったけど、聞き返した時に断言したってところから冗談とかじゃなくて、目の前にいる女子が本物の悪魔・・・。

確認でヴァンパイア・フィリア、別名吸血病（聞いたことがあるだけ。血を好む嗜好だ、とか血を飲まないと気が済まない、とか・・・）を疑って聞いてみたけどそれも違う。

目の前にいる女子は、紛れもなく吸血鬼なのだ。

「・・・なんとなく納得できるようなそつでもないような・・・」
「絶対に知られちゃダメって、お母さんにきつく言われてただけどね・・・高校入ってすぐばれちゃった・・・」

あはは、と笑う代永。しかしその顔はどこか悲しげだった。

「・・・で？どうしたいんだ？口封じでもするか？」

「そ、そんなことしないよ！ただ黙っててもらえればそれでいいし、私にそんな力ないもん！」

「ちょ、ストップ！近づかないでくれ！」

ズイツと体乗り出して近づく代永。俺はそれを体を大袈裟に遠ざけてまで拒絶する。

・・・やばい、鳥肌が・・・

「・・・どうしたの？」

すぐに言った（というか叫んだ）のが幸いしてか、すぐ離れた。鳥肌が立っていた。

「・・・悪い、俺異性が苦手なんだよ・・・つか嫌いレベルで・・・あ」

途中まで言っていることに気付いた。

「だったら、俺の異性嫌い直すのに付き合ってくれないか？」

等価交換の原則、とでも言えばいいのか？この提案なら乗ってくれると思う。

別に「恋人になってくれ」とか、ものっそいエロい事を言ってるわけじゃないし。こっちは黙っておく、っただけだと代永が拒否しそっうだしな。「榊君に苦労ばかりさせられないもん」とかいつて。

「それなら・・・いいよ？・・・よかった、えっちいこととしてくれ、っって言われるかと思っただ・・・」

・・・なんで同じことを考えてんだよ代永のやつは。

「・・・あのね、榊君」

「・・・なんだよ」

「榊君って・・・前私を助けてくれたりしなかったっけ？」

「・・・知らね」

「・・・そう、だよ。こんな都合よくその人がいるわけ、ないも

んね」

突然聞かれたことにそっけなく答える俺。

・・・気のせいだろ。俺も代永のことどっかで見たことあるような・・・なんて思ってるけど。

「・・・それとき、友達に・・・なってくんねえかな」
「友達？」

「俺、こんなだから、異性の友達いなくてさ・・・」
「友達・・・うん、いいよ！私も欲しかったんだ、気軽に話せる男の子の友達！」

突然代永が俺の手を握ってきた。それはそれは嬉しそうに・・・って！！

「うおわあああっ！！だ、だから手を握ったりしないでくれ！と、鳥肌が、鳥肌が立つから！！」
「あ、わ、ご、ごめん！」

俺が怒鳴る勢いで言うと代永はすぐに離れてくれた。

こうして、吸血鬼の女の子とのギブアンドテイクな感じの生活が始まった。可愛くて親衛隊すらあるって言われる吸血鬼な女の子と、普通って言われてもおおかしくない異性嫌いな男、つまり俺との。

・・・一体、何があるんだろうなあ・・・というか幸先不安だなあ・・・

そのにっ！ 助けた女の子は吸血鬼！？（後書き）

今回は親衛隊（笑）が登場します。

この親衛隊（共）、自分でもネタキャラにします。ついでに言いつこいつら、所々出てきます。次話以降。

あ、空鍋とかは出てきませんので。ヤンデレキャラを出さない・・・つもりです。空鍋を出さないことは公言しておきますが。

そのさんっ！ 代永咲夜華親衛隊の恐怖（前書き）

この小説最大のネタキャラ軍団、親衛隊の登場です。キモかったり笑いのつまみになったりなど、お好きな扱いでどうぞ。

そのさんっ！ 代永咲夜華親衛隊の恐怖

「敏豪、今朝フラフラしてたけど一体何があった？」

「……気にすんな、昨日寝るのが遅かったただだよ……」

朝、いつものように一樹と歩いていた。

「ま、気にしないでおいてやるよ」

「助かるぜ、とっつぁん」

「バカ、まだ老けてねーよ！まだピチピチの15歳だっつもの！」

「……わり、さすがにそれは引くわ……」

「……すまなかった……」

お互いからかい合いながら（最後は見事にすべらかした一樹に引きながら）校門をくぐって玄関に着いた時だった。

「あ、榊君おはよ」

「お、おう……おはよう、代永……」

玄関ですれ違った代永に挨拶され、俺も（半ば怯えながら）返した。それを一樹にしっかりと見られていた……

「……なあ、敏豪」

「・・・なんだ？」

「お前いつ代永と仲良くなっただん!? 昨日まで挨拶されることもなかったじゃねえかよ!!!」

「昨日転んだ所に俺がいて下敷きになったのを助けられたと思われただよ、それ以外に何かあるのか!？」

一応あのことは伏せておいた。代永との約束だし。

「・・・お前、今日が命日になるかもな・・・」

「・・・今日って・・・ああ、そう言えば代永には親衛隊がいるっていつてたっけ・・・。・・・さらば、俺の人生。」

「敏豪、俺はお前と共に死んでやるからな、だから安心して死んでこい」

「・・・どうしてだろう、目から汗がたらたらと・・・」

正直、一樹の心ないような気遣いが心に染みだした瞬間だった・・・。
道連れ大歓迎だが、先に死ねていうのは・・・

「貴様っ！我が姫を誑かしたな！？」

そして悲劇は起きた。マジ悲劇。どうしようもないくらい悲劇。はつきり言おう、これが今後の俺の学校生活の障害になった。階段登るうとしたら踊り場に変人がいた。

「・・・なあ、もしかしてあれ・・・」
「もしかしてももしかしなくてもあれだな、というか「我が姫」
つて・・・」
「・・・ぷっ」
「笑うな!!」

俯いて笑いをこらえる俺と一樹。・・・いや、だつてな? 一人称「我」つて今まで聞いたことないぞ!? しかもポーズがキモい(俺達に向けて指をビシッ!と突き付けている。脚も変にクロスさせて・・・なんかキザっぽい感じでやってるけど・・・如何せん基盤がキモいからキモさも当社比三割増し)!んでそれが笑いを助長させてんだよ!!

「ええい、そんなことはどうでもいい! 榊敏豪! 今すぐ我が姫から離れる!!」

「・・・なあ、今・・・」

「明らかに名前間違えたな。というか普通は敏豪としかひでって呼ばないけどな」

「・・・シャララップ!!」

・・・どうしよう、「冗談抜きで我慢の限界きそうな・・・」

「・・・面倒だしスルーしようぜ、スルー」

「そうだな、こんな奴に構って遅刻とか恥以外の何物でもないしな」

俺達は階段を上ってさっきから「ビシィッ」と指先をこつちに突き付けたままのポーズをとった変態（笑）を大袈裟に避けて進む。
・・・第一こんなのと関わっていたら一体どれだけの俺が笑い死ぬか・・・

「・・・・・・・・」

そして変態は呆然と立ち尽くす。何一つ言葉を発することもしない。
・・・ザマミロ。

「き、貴様！我らを敵に回してこれで済むと思うなよー！」
「あーはいはい。敵にでもなんでも勝手に回せー」

後ろからあの変態の「ぐぬぬ」という声が聞こえたが、俺達は一切合切無視して教室へ向かった。

教室に入ってから悲劇は続く。

・・・つか親衛隊って、こんなにいたのね・・・

「殺せつ!!」「殺せつ!!」

「開口一番に「殺せ」って！たかが挨拶だろうがよ!!」

「さすが親衛隊、自分達がされないことを他人がされると途端に殺戮マシーンに早変わり・・・」

俺は教室から走って逃走、それを追いかけ始めた親衛隊、総数15人。全員釘バット所持がデフォルトなのはご愛嬌。

「我が姫を誑かす輩はーっ!!」

「Search and Destroy!!見敵必殺!!」

「だからなんで殺されなきゃならねえんだってのーっ!!」

ちなみに俺は始業ベル直前で先生に保護してもらえた。親衛隊の奴らは皆説教。・・・通称『生徒指導室の化け物教師』に・・・

「・・・さすがに昼に現れるなんてことはないだろ」

「だよな。代永はいねえし、落ち着いて飯も食える・・・あ」

鞆を開けて気付いた。朝、昨日のことでグロッキーになっていたから昼飯作ってくんの忘れた・・・

「・・・一樹、悪い。先に飯食っててくれ。購買でパン買ってくる」
「おー、気をつけてなー。くれぐれも代永に会って話したり親衛隊
にあったりするなよー」
「うーい」

一樹の忠告を背に教室を出た瞬間だった。

「発見、我らがEnemy!!」
「うわ、ダサっ！何処の日本語習いたてな外国人だよ!!」
「捕まえる、そして殺せ!!」
「捕まるかっての!!」

そして第二次逃走劇が始まった。・・・なんか朝より人数増えている
気がするんだけど!?

「・・・はむっ」

教室の、自分の席（隅っこ）で女子が一人、黙々と弁当を食べていた。

「・・・代永、咲夜華・・・。魔族類に該当する可能性大・・・尻尾を掴み次第討魔を開始する必要あり・・・なのです・・・あむ」

何やら物騒なことを言っていた・・・が、その後の一言が物騒さを

打ち消してしまっていたのはご愛敬だ。

「な、何とか、撒いた、か・・・」

購買で、俺は一息ついていた。親衛隊の奴ら、便所を上手く使って逃げ切ることが出来たようで・・・

「あれ、どうしたの榊君？」

「……マジで？」

声をかけられてそつちを見た時、そこにいたのはもう一つの危険因子（俺的に）、代永だった。

親衛隊の奴らは……きつちり撒いたな、いない。

「……親衛隊の奴らに……追われてたんだよ……」
「親衛隊？」

どうやら代永は親衛隊の存在は知らないらしい。……というかあんな馬鹿騒ぎしていて全く知らないってのもどうかと思うんだが。

「……気にすんな。ホントなら飯買いに来ただけなんだよ……」
「そつか。その親衛隊って人達に気をつけてね？」
「……気をつけるよ……」

適当にサンドウィッチを二つ買って立ち去る俺。いつまでも代永と一緒にいたら何ればれるからな……居場所。

放課後。あいつらは本当にしつこかった。

「榊敏豪えっ！！本日昼、姫と会って話をしたというのは本当かっ
!?!」

「……敏豪、マジか？」

「……購買行ったら偶然……というか元はというとお前らなん

だよ！！お前らが追いかけて回したりしなきゃ何事もなかったんだっ
つーの！！」

生徒玄関を出て数メートル歩いたところで・・・奴らの群れと鉢合
わせ。・・・つかいつ昼に会ったのを知った？俺誰にも言っていない
ぞ？

「問答無用！我らの姫を汚す輩は・・・死してその罪を償うべしい
つ！！」

「だからって簡単に死ぬるかよおっ！！」

恒例釘バット軍団が突撃しようとしたその瞬間だった。

「あれ、これって一体何？あ、榊君も」

彼らにとつての姫、俺にとつては・・・救世主・・・とでも言うの
か？代永がいた。

「ひ、姫・・・」

「今日も・・・神々しい・・・」

「ああ・・・これで何時死んでも・・・いい・・・」

「え、えーと・・・どういう・・・こと？」

突然ひれ伏したり崇めたりなど、なんかよく分からない行動（
というかあいつらにとっては崇拜している感じだが）に代永は困る。

「・・・昼に言ってた親衛隊だよ。代永の。」

「え、ええっ!? わ、私の!? そ、そんなの困るよ・・・」

本当に困り果てた様子の代永。しかし目の前にいる連中は行動を止めようとしなない。

「代永、解散っていつてみたら?」

一樹が助け船を出した。簡単に言えば、崇拜している奴らなのだから、『解散』とでも言えば散る、という考えだ。

「え、えと・・・か、解散!」

代永が恥ずかしそうに「解散」というと・・・

「了解しました、姫様!」

「ひ、姫!」

盛大な崇拜ボイスと共に軍隊さながらの解散を見せた。というか靴

音を揃えて立ち去る奴らを初めて見た。

そして去り際の「姫」発言に代永は困っていた。

「……姫……そんな大層な人間じゃないよお……」

……否、照れていた……

そのさんっ！ 代永咲夜華親衛隊の恐怖（後書き）

今回ちよっぴり出てきた、ちよっと特徴ある口癖の女の子。彼女は2話ほどくらいで大きく関わってきます。なんとなく雰囲気はあれですけど。

一話あたりの文字量は大体1400〜5000の間にするつもりです。少ないなどあるかもしれませんが、そこは勘弁していただくと幸いです。

そして最後に。

急展開過ぎる展開は、目をつぶって頂けると嬉しいです！！

そのよんっ！ 進展した(?) 二人の距離(前書き)

さて、何が進展したのか？それは本文を見てからのお楽しみ、です。

そのよんっ！ 進展した(？)二人の距離

相変わらず親衛隊共に追われて追われて・・・な間の昼。

「・・・ちくしょう、パンは確保できたけど場所が確保できねえつて・・・」

廊下をぶつくさ言いながら歩く俺。教室には戻れない。戻ったところであいつら・・・親衛隊がいる。さっきも「姫から離れる軟弱者めが」とか言われて追いかけて回された。・・・軟弱者で・・・

「・・・しゃーなし、だな。屋上で飯食うか」

昼だけこっさり開放されている屋上。そこなら誰も来ないだろうと思っただ俺は屋上へと繋がる階段を上っていった。

「……お邪魔しますよーっと……」

誰もいない（はずの）屋上のドアを、「お邪魔します」なんてふざけて行ったら……

「へっ!?!」

……いきなり声が聞こえた。女子の。うわ、最悪。

「……つて、榊君か……」

「……なんでここに代永がいるんだよ」

「ここにいと落ち着くんだ。誰もいないし、のんびり空を見れるから」

「……なるほどな」

俺は金網にもたれて座り込んだ。

「あ、そこ汚いよ？ちょっとずれるから一緒に座らない？」

さすがにそれはまずいと思ったらしく、代永は俺の手を掴んだ。

「ちょ、まっ、待て！！い、いきなり掴まれると鳥肌立つ！！」

「え、あ、ご、ごめん……。で、でも、こっやってかないと異性恐怖症……。だっけ？治らないよ？」

「とか言っただけで急いだってすっと治るもんじゃないだろ！！？」

「こっこのって少しでも強引な行動しないと治らないって聞いたよ！？」

「強引にやっつて逆に悪化したらどうすんだよ！！！」

お互い譲らずの言い合いは、結局俺が折れる形となって終息した。

「・・・ダメだ、やっぱり鳥肌が・・・」
「我慢しないと！大丈夫だよ、その内慣れるって。・・・あふう・・・」

突然代永が変な声を出した。

「代永？」

「・・・え、あ、ご、ごめんね？変な声出しちゃって・・・」

「一体何かあったのだろうか？と、心配そうにしていたら・・・」

「・・・実は・・・ね？あの時榊君の血、飲んじゃったでしょ？それなら・・・榊君見てたら血が飲みたくなっちゃって・・・てへ」「いや、てへじゃないだろてへじゃ」「

舌をちよろつと出して可愛らしく「てへ」と言う。しかしそれは俺にとっては死刑宣告間違いないわけで。

「・・・ダメ？」

「ダメに決まってるんだろ？俺の命にも関わるし、下手にやればねたらどうすんだよ？」

「ちよつとだけ・・・ね？ホントにちよつとだけだから・・・お願い！」「

「・・・ちよつと待て・・・」

俺は辺りをきよるきよる見渡してみる。・・・親衛隊の奴らはいない、ここは俺と一樹しか知らないし、一樹は教室で飯を食ってるからいない・・・大丈夫、か？

「・・・しゃーねー。こういう時だけだからな？ホントは絶対吸わせねーんだけどな」

「ありがと！じゃ、いただきますーす」

・しかし・・・吸われるってのは・・・いい気分じゃねえ・・・な・・・

「……はふう……ごちそうさまでした」
「……お、お粗末さま……でした……」

ちびちびと、だったが……たつぷり2分、吸われた……。その2分間はとも俺に耐えられる時間じゃなかった……。鳥肌が立っているし、実質今気を失いそうだから……

「さ、さっさと戻るぞ。授業に遅れるのは絶対にいけねえしな」
「そだね。じゃ、戻ろっか」

にこにこ先に行く代永と、ちょっとやつれた感じの俺。二人で教室に戻った。親衛隊の奴らには見られてなかったのは救いだっただ。

「・・・尻尾、掴んだのです」

屋上の給水タンクの陰で、少女が呟いた。彼女は終始一人の行動を見ていたのだ。それはまるでストーリーカーさながら。

「・・・今日の放課後、一気に滅してあげるのです・・・代永咲夜
華・・・」

そのよんっ！ 進展した(?) 二人の距離(後書き)

ちよつと敏豪が異性嫌いを克服しようとした一瞬でした(咲夜華に血を吸わせた、という行動が、です)

今回はちよつとバトル入りまーす。ほんのちよつとでーす。

「そのさんっ！」から出てるなーんか被魔師っぽいよーな女の子については、次回正体が分かります。ちなみに被魔師としてはあり得ない存在なのです。

プチ問題。

敏豪の名前には元ネタがあります。さて、その元ネタとは？

・・・別に正解しても特に何かあるわけではないので、答えたい人だけ答えてみてください。正解は「そのごっ！」で。

そのごっ！ 会合、被魔師の少女（前書き）

ついに動きます、被魔師（？）の少女。彼女の正体とは一体？本当に被魔師なのか？それとも・・・？

それは本編で。

ちなみに前回の答えも、後書きでちよろつと載せます。

そのじっ！ 会合、被魔師の少女

「・・・部活・・・終わった・・・！し、死ぬかと・・・思った・・・」

今日も今日とて写真撮影のために走り回らされた・・・そんな部活それが終わってへとへとになって生徒玄関に行つて、ある事を思い出した。思い出したくないことを、だ。

「お袋に買い物頼まれてた・・・」

軽く落ち込んで諦めて外に出たら・・・

「榊君、部活終わったんだ。・・・あれ？どうしたの、落ち込んで？」

・・・まるで待つてたように代永がいた。・・・というか出たとき偶然代永に鉢合わせした、といった方が正しいかも。

「・・・代永、お前って俺のことつけてねーか？ホント偶然っていう言葉が似合わないくらいに会うんだけど・・・」

「気のせいだよ？私も最近よく会うなーって思うけど」

・・・本当にそんなのだろうか？行くところ行くところなんかいる気がするからほつきり言つと疑心暗鬼な状態・・・

「・・・一緒に帰るっていうんなら無理だぞ？買い物行くからよ・・・」

「私もお買い物あったから、一緒に行つていい？」
「・・・好きにしてくれ」

近くのスーパーまで代永と二人で行くことになった。・・・はつきり言う、俺にとっては地獄だ。異性苦手なものよ・・・

「さ、柿君のところで結構晩御飯に材料使ったね・・・」
「・・・週間買いこみだよ、毎日俺が行けって話でさ・・・」

両手に袋を持って歩く俺と、その隣で片手に袋持って歩く代永。実際知らなかったのだが、代永と俺の家は結構近い所にあるらしい。知らなかった訳は、俺は朝一樹んとこ立ち寄ってから別の道通っていくため、だった。帰りも絶対に別々だし。

「お、重く・・・ない？」

「全く重くないって。というかさ、代永が買ったのってトマトジュースと・・・ポテチかよ」

「だって・・・コンソメ味好きだもん・・・」

他愛のない話をしながら堤防沿いを歩いていた時だった。

「・・・見つけたのです、代永咲夜華・・・」

不意に声が聞こえたのは。

「・・・誰？」

「えっと・・・確か同じクラスのリーアフォルテさん・・・だったっけ？」

俺達の後ろに立っていたのは、代永が言うと同じクラスのナタリア・リーアフォルテ・・・らしい。

「・・・なあ、代永・・・」

「え、なに？」

こそつと耳打ちを始める俺と代永。

「・・・アイツって・・・いたっけ？」

「・・・いたよ？・・・多分・・・」

「さっきから何をだべってやがるのです？」

・・・よくよく考えるとさ、口悪いよな、アイツ・・・

「御託や理由はないのですが・・・代永咲夜華、お前を滅してやるのです！」

・・・滅する！？・・・もしかして・・・

「リーアフォルテ、お前まさか・・・シスターとかそういうのか！？」

「シスターとかじゃないのです。私は被魔師なのです」

被魔師？あれ？

「・・・外国人で被魔師って・・・なくね？」

「・・・えっと、榊君？外国にも被魔師さんいるよ？」

「マジで？」

リーアフォルテを放置したまま漫才が進む。俺がメインで。

「ごちゃごちゃうるさいのですっ！さっさと私に狩られるがいいのですっ！！」

「え、ええっ！？ってきゃああっ！！」

突然飛んできた十字架を模したナイフをしゃがんで回避（咄嗟レベルで）した代永。

「・・・代永！！」「お前は動かないでほしいのです！」「・・・なっ・・・！！？」

代永の元へ（苦手つつつても心配だから）行こうとしたら、リーアフォルテに制止された。

「面倒なのです・・・！相手は吸血鬼、私も本気を出させてもらうのです！！」

そう言つて蹲つたリーアフォルテの背中から、突然バリっという音とともに黒い羽根が生えた・・・つておいっ！？

「ちよ、羽根！？つか翼！？お前一体何なんだよ！！」

「私は・・・被魔師であつて夢魔なのです！！被魔の力を持った夢魔、それが私なのです！」

「・・・なんちう矛盾した存在だよお前は・・・」

呆れながら突っ込んだ俺。リーアフォルテはそんなことはお構いなし、と言わんばかりに翼を広げて・・・

「さつさと・・・死ぬがいいのですっ！！」

「え、あ、ちよ、いやあああっ！！」

リーアフォルテが代永に再び突っ込んだ。今度は爪を伸ばしている。明らかに殺す気だ。

「させるかああああああああっ！！」

動くな、とは言われたが、そんなことは聞いていられるわけがない！
！なんでつつたつてよ・・・

チツ！！

「さ、榊・・・君・・・？」

「・・・動くな、と言ったはずなのですよ？それなのに・・・なぜ・・・
なぜそいつを助けるのです！？」

俺は代永を横から突き飛ばした。その時軽く肩を切ったようだが、
そんなことは気にしていられない。

「なぜって・・・？そんなの簡単だよ・・・！」

起きあがりながらリーアフォルテに向かって言う。

「ダチを・・・初めてできた女子の友達を！むぞむぞ殺させるわけにはいかねんだよ！！」

そのじっ！ 会合、被魔師の少女（後書き）

「そのさんっ！」から出てた少女の正体は、被魔の力を持った夢魔でした。ワーお、なんという矛盾した存在……

次回は……このバトルの決着が。そして敏豪のフラグスキルが発動します！

……ところで、吸血鬼って悪魔ととっていいのでしょうか……？

そして答え。

敏豪の名前の元ネタは……『ガキの使いやあらへんで！』の総合演出のハイポーの本名を使わせてもらいました。詳しくは某W先生に。

そのろくつ！ 『非』策師敏豪、意思に反して女の子を二人も攻略す（前書き）

6話です、戦いが終わります。そしてヒロイン二人目が確約します。

・・・まあ、誰とはいいませんが。

ついでに言うと、敏豪リア充の仲間入りおめでとつ！な回です。

さらにどうでもよくない話ですが、タグにあるR15は、今回から大きく関与してきます。ま、発言に問題がありますから。

そのろくつ！ 『非』策師敏豪、意思に反して女の子を二人も攻略す

「友……達……」

リーアフォルテは俺の言葉を反芻して動きを止めた。俺は爪か何か
が掠った左肩から血を流したまま代永の前に立ちふさがるようにし
て立っている。

「ああ……。そいつが人間だろうとそうじゃなかるうとも、友達
と決めたら助けあうってのが当然じゃないのか!？」

「でもっ! そいつは吸血鬼なのですよ! ? 私以上に人に害を与える
! 悪魔なのですよ! ?」

リーアフォルテの言っていることも分からなくもない。一応被害に
遭ったなんて言い方、俺もできるから。けど……

「全ての悪魔が害、ということもないだろ! ? 現に代永が誰かに被
害を出したか! ? 出してないだろ! ?」

「……っ!」

正論による論破。そこまですはいわないけど、代永が死んでいいわ
けないという理由にはなっただはず。

……しかし、そう思うのがいけなかった。ただの慢心だと思うの

にはそう時間がかからなかった。

「それでも・・・それでも私は・・・っ！！そいつを滅さないといけないのです！父様のためにもっ！！」

突然激昂した、と思ったら突っ込んできたリーアフォルテ。さすがにこのままだとマズい。

「危ないっ！」

「ひゃわああっ！？」

勢い良く飛翔し、代永めがけて突っ込んできたため、代永を抱きかえるようにして回避。鳥肌？立ってるに決まってるんだろ！？下手したら膝だって笑ってるっての！

「くそ、堤防沿いじゃ流石に狭くて分が悪い・・・！広い所に逃げて対策を練らないと・・・！」

「・・・榊君！いい場所があるの思い出した！！」

通過したのを確認してぼやいていたら、代永が急に声を出した。耳元だったからちよつと耳鳴りが・・・

「家の近くの公園なら・・・今の時間帯だったら誰もいないし十分

広いから……!」

「だったら……そこまで逃げるぞ!人混みに紛れちまえばあいつもちつたあ攻撃しにくくなるはずだから……!」

俺が立ち上がった時、代永に異変が起きた。気付かなかったが……

「……痛つ……」

「どうした!？」

「さっき慌てて避けた時に……足捻っちゃったみたい……」

左足首を痛そうに押さえる。急襲だったから慌てるのは仕方がない。こつなつたら……俺も鳥肌立っし代永も嫌がるかもしんないけど……

「すまねえ代永、ちょっとばかり我慢してくれ!」

「へ?我慢って何をきやああっ!？」

代永を抱きかかえて走る。俗にいう『お姫様だっこ』というやつ……だったはず。本当にこれしか方法がなかったんだよ、代永を守りながら逃げる方法が!

「絶対に逃がさないのです!！」

リーアフォルテも俺達を追いかける。絶対に捕まるわけにはいかねえ！捕まったら・・・何のために毎日走りまわらされたのかが分かんなくなっちまうから！！

榊君に突然お姫様だっこをされて、助けてもらって・・・

不謹慎だけど・・・ドキドキしている私がいた。

(・・・なんだろう、さつきから榊君があ那时的男子と被って見え
ちゃう・・・)

あ那时的男子・・・そう、小学校の頃、私をいじめてたクラスメ
イトの子達から身を呈して守ってくれた、とつても優しい男子。
その時の姿と今の榊君が被って見えて・・・

(やっぱり・・・あ那时的男子って榊君だったのかな・・・)

リーアフォルテから逃げ切って……な訳がなく、公園までしつかりと追いかけられた。着いたには着いたが……正直疲れた。

69

「逃がさない、と言ったはずなのです……！」

「ちったあ妥協してくれると思っただけだな……」

目的地の公園で対峙する俺とリーアフォルテ。俺は代永を背中に隠したまま……。戦うとなると圧倒的に不利。戦う気なんてこれっぽっちもないけど。

「さあ……そこを退くのです……！」

「退くわけにはいかねんだよ！」

「だったら……容赦はしないのです！」

こっちに向かって走り出すリーアフォルテ。それに対して俺は一切動かない。・・・理由は簡単、アイツの『父親の地位への執着から目を覚ます為』に行動するつもりだったからだ。

「・・・代永、ちょっとでも動けるようなら離れてくれ。驚かせるかもしれないからね・・・」

「え、と・・・なんで・・・？」

俺の言っている意味が分からなくて聞いているような代永（実際分らないと思うが）。

「・・・大丈夫。絶対に護ってみせるから。それに、彼女も傷つけないようにやるつもりだ」

「・・・！」

そして改めてリーアフォルテを見る。走っている+距離が結構あるため、まだ半分距離を詰められたくらいだ。

「あなたを倒して・・・後ろの悪魔を・・・！」

そしてあっという間に距離を詰めて、俺の方に手を伸ばし・・・

その手を掴んで、体を捻って背負い上げ、その勢いそのままに地面に叩きつけた。

「かはっ……」

叩きつけられた反動で、一瞬呼吸が止まるリーアフォルテ。俺がやったのは『背負い投げ』。一樹が何故か突っ込んできた時に反動でやってしまう、本来は柔道の技……らしい。

「さ、榊君……リーアフォルテさん……大丈夫なの……？」

「ちよつと勢いはあつたかもしれないけど……多分大丈夫なはず……」

リーアフォルテを見ると、ゆっくりとだけど体を起こしている。が、腕に力が入らないらしく、プルプル震えていた。

「こ、こんな所で……負けるわけには……」

「……ったく……」

はあ、と溜息をついてリーアフォルテの前に行く。鳥肌が立っているのはデフォルトだが、今はそんな事を気にしてられない。俺が今やるべきなのは……

「っ!？」

パンツ!

リーアフォルテの目を覚ましてやるだけだ。

「いつまでお前の親父のことを気にかけている必要があるんだよ。お前にはお前の人生があんだろ？お前らしく好きに生きりゃいいんだよ」

「でも……父様は私のせいで……」

……つたく、どんだけ頑固なんだよ……

「お前の親父の本心を分かかってんのか？本当はお前にこんなことをしてほしくない、なんて思っただけか？それに、お前の親父がお前に責任を押し付けてしまうなんてことはしねえって。」

「……」

親がこの心配をしないわけがない。それはどこも同じはず。子が被魔師やってるなんていう話を聞いたら心配するだろ？死と隣り合わせだろうから。

「あ……」

リーアフォルテの頭に手を置いて、諭す。

「一度お前の親父と話しとけ。ちゃんと話し合えばお互い分かりあ

えるだろうからな」

そして立ち上がって代永の方へ向かった。後ろからリアフォルトのなく声が聞こえたが・・・実をいうと・・・

「もう・・・限界・・・」

「さ、榊君!？」

異性に触ったりしまくってたから・・・もう・・・ダメ・・・

目の前で、私を助けてくれた男の子が倒れてしまった。嫌いな異性に無理に触り続けた結果・・・だと思っ。

気を失ってる・・・だけみたい。リーアフォルテさんもこっちに攻撃する様子はないから大丈夫だと・・・思っけど・・・

「・・・なんだろ・・・さっきからドキドキしっぱなし・・・。やっぱり私・・・榊君のこと、好きだったんだ・・・、あの日からずっと・・・」

私は顔が真っ赤になったまま、榊君の頭を膝に乗せた。捻っちゃった足が痛くないように座って。

「・・・ありがとう、榊君・・・」

あの盛大なバトル&盛大な失神があったその次の日の朝。

「うーあー・・・だるい・・・」

「お前一体どうしたんだよ・・・昨日代永から『公園で榊君が倒れてるの』と聞いて飛んできたらマジでぶっ倒れてやがるんだからよ」
「聞かないでくれ・・・」

一樹とは部活の関係で校門で別れて、そして玄関で靴を脱いで室内履きに履き替えて出た時・・・

「榊君！」

「よ、代永！？」

急に代永が俺に腕に抱きついてきた。ぎゃああっ！！

「ちょ、鳥肌、鳥肌立つから離れてくれ！！」

「ちょっと話したいことあるから・・・ダメ？」

「ひ、昼でいいだろ！？」

「い、今言いたいので！！」

代永と言いあいをしていたら・・・悲劇は起きた。

ド
ンッ！

「うおっ!?!」

「ひゃっ!?!」

俺の背中に突然衝撃が。何が起きたと後ろを見たら・・・

「り、リーアフォルテ!?!」

「リーアフォルテさん!?!」

リーアフォルテが俺の腰に抱きついてた・・・!!

「話したいことがあるのです。今言いたいのです。私の本心なので。」

淡々と俺の腰に抱きついたまま言う。い、一体何を！？早く離れてくれないとまた・・・

「私、あなたのことが好きなのです。私に新しい道を示してくれたあなたに惚れたのです」

『っ！？』

突然の告白。・・・って待て！俺めちやくちや困るんだけど！！

「ちょ、待て！いきなり言われても・・・」

「本心なのです！本心なのです！」

「さ、榊君！わ、私の話なんだけど・・・！」

「よ、代永！？」

突然代永が話を切り出した。・・・今度はなんだ！？

「わ、私、あの日助けてくれた男の子が榊君だって昨日分かったのだ、だから・・・私・・・あの日からずっと榊君のこと想ってたの！！だ、だからはつきり言います！私と付き合ってください！！」

・・・また盛大な告白!?

「親衛隊いないよな!？」

「親衛隊来たら私が黙らせるもん!！」

・・・顔真つ赤にして言っても説得力無いって・・・

「・・・代永咲夜華。お前みたいなちっばいに私のダーリンを落とすことなんてできないのです」

「ダーリンで・・・俺はお前の夫になった記憶はないぞ!？」

「ちっば・・・!あ、あなただって・・・寧ろあなたの方がペツタンコじゃないの!！」

「これだからちっばいは・・・」

突然腰から離れたリーアフォルテは、制服の袖に手を引つ込めて、ブレザーの中でもぞもぞとし始めた。

そして・・・

「っ!！」

「・・・ちよ、まさか・・・」

突然、というかいきなりだ。いきなりリーアフォルテの胸が大きくなった。効果音的に言うと『バイン!！」とか鳴りそうな勢いで。

「無理やり上からコルセットで押さえていたのです。実際はこんなに大きいのですよ?」

「~~~~~っ!!」

・・・もう頭が痛くなってきた・・・

「さ、榊君! あんな大き過ぎるのってダメだよね!？」

「ちっばいより大きい方が好き、のはずなのです。そうですね? ダーリン?」

「もう・・・好きにしてくれ・・・」

朝から涙が枯れそうな気がした・・・といつか不安がさらに倍増した・・・

・・・ひょっとして俺、女難の相出てたりする?

おまけ

「殺せえ! 姫の心を盗んだ愚か者をこの世から消すのだあ!」

「「「「Sir, yes sir!!」」」」

「軍隊かよテメーらはーっ!!」

親衛隊に追い回されることになった。ついでに言うと、代永とリーアフォルテから「名前で呼んで!」と言われたことも、リーアフォルテ・・・いや、ナタリアから「ダーリン」と呼ばれていることもそれに拍車がかかっているようで・・・

「殺せーっ!!」

「ガンホー!ガンホー!!」「」「」

「好きでリア充になってるんじゃないやねえよーっ!!!!」

さらにおまけ

同日朝のSHRが終わった後のことだ。

「なあ・・・敏豪・・・」

「・・・どうしたんだよ、一樹」

「リーアフォルテって・・・リーアフォルテって・・・」

「・・・ナタリアが?」

「まさか口リ巨乳だったとは!!145くらいでサイズが見た目でFだぜ!?!」

「・・・確かに俺もそれは思ったけどさ・・・」

「・・・ということだ敏豪。リーアフォルテを振って俺にくれ」

「本人の意思は?」

「俺が幸せになれば無問題！」
「お前最低だな」

そのろくつ！ 『非』策師敏豪、意思に反して女の子を二人も攻略す（後書き）

はい、メインヒロインに、ナタリアが追加され、めでたく敏豪はリア充になりました。おめでと羨ましいんじゃないよー！

・・・すみません、取り乱しました。

今回はキャラの紹介をします。今のところの、ですが。

で、プチアンケート。

先ずは「これ以上ヒロインを増やすべきか増やすべからずか」。
で、増やす場合・・・というか一応増やすなら4人目まで、として
まして・・・

「4人目をどうするか」です。

一応候補は

『ソロモン72柱、序列16位・ゼバル』

『ソロモン72柱、序列38位・ハルファス』

のどちらかなんです。性格も出来れば案をください。3人目はもう
決まっていますので。ソロモン72柱の誰かですけど。

期限は11月11日（金）までです。

キャラ紹介なのです そのいちっ！（前書き）

タイトルは誰の口調なのか・・・察してください。

キャラ紹介とキャラへの適当な質問4つを掲載しました。

多少今後のネタバレ・・・になるかもしれないことが書いてあるの
で、軽く閲覧注意、ということぞ。

キャラ紹介なのです そのいちっ！

榊 敏豪 さかき としひで

県立西条東高校（敏豪達に通っている高校の名前です）1年、コンピュータ部。

成績は可もなく不可もなく、ルックスも普通。どうでもいいが博学。茶色い短髪（地毛）。身長は167.4。異性と話すことが苦手で、実をいうと近づくのも苦手。昔女子に弄られたのが原因。

性格は優しい。が、結構悪戯好きだったりなどお茶目な所もある。小学校の頃苛められていた咲夜華を助けている。

割とトラブルに巻き込まれることが多く、別名『仕事請負人』と言われている。因みに本人公認。

桐生 一樹 きりゆう かずき

県立西条東高校1年。サッカー部。

黒短髪。身長は170.3。

成績は敏豪と比べると・・・察した方が早いくらい。そして機転がきく。どうしてそれを勉強に生かせないのだろうか・・・

敏豪とは仲が良い。ちなみに・・・性格はちょっとアレ。優しいのにそこが残念。でもイケメン。わお残念。

代永 咲夜華 よなが さやか

県立西条東高校1年。無所属。

成績優秀でスタイル抜群。入学後僅か2ヶ月で親衛隊が出来上がるほど。

容姿は腰までの黒髪ロングで、そこそこ胸がある（D）。身長はぎりぎり160（小数点第3位の所に1が付いている）。

正体は吸血鬼（しかし未熟）。血を吸わなすぎると倒れてしまう。

性格は優しく一途。そしてアグレッシブ。ついでに嫉妬深い。実は小学校の頃敏豪と会っており、苛められていた所を助けられて以降ずっと彼のことを想い続けていた。

ナタリア・リーアフォルテ

県立西条東高校一年。無所属。通称ナタリー。

日本人とイギリス人のハーフの女の子で、正体は咲夜華を討滅しようとして狙っていた討魔の力を持った夢魔。（父親が討魔士、母親が夢魔という、変わったハーフ。夢魔なのに討魔の力を持っているのは突っ込んだら負け）

口癖は「なのです」「です」。時たま毒舌。

肩までの金髪で、ロリ巨乳（測定した結果、Fという結果が出ている）。身長は148.3。

「悪魔は討魔されるべき存在」「父親のことを周りに知らせるためには自分が動かないといけない」という考えを持っていたが、敏豪のビンタと言葉によって考えを改めた。

初めて叱ってくれた相手、ということに敏豪が好きになる。咲夜華とはかなり仲が悪い。

ついでに言うと、敏豪に陶醉と同レベルで惚れており、彼のことを「ダーリン」と呼んでいる。ちなみに咲夜華は「ちっばい」「おまえ」。

モブ共

1 - Bの皆さん

かなりノリのいいやつら。敏豪が『請負人』ということを知っている、暗黙のルールを作ったのもやつら。ナタリアのことを「敏豪の嫁さん」という認識を持っており、また、咲夜華のことも「敏豪の嫁さん」と認識している。弄るのもこいつら、助けるのもこいつら、

励ますのも何をするのも基本こいつら。実はいいやつらの集まり。大半が男子だが。

思考は『リア充？そりやおめでたいことじゃないか。だったら盛大にいじ・・・ゲフンゲフン、祝福してやらなきゃな』というもの。クラスの中に親衛隊はいない。他のクラスの奴がいて、そいつが親衛隊ということはあるが。

ちなみに今現在出てきていないが、今後出てくるのでご安心を。

代永咲夜華親衛隊の奴ら

咲夜華のことを心底好いている変人集団。陶醉レベル。というか崇拜しているのも。

咲夜華のことを「姫」と呼んでおり、彼女を誑かす存在は排除しようとする危険思考を持つ。が、咲夜華には頭が上がない情けない存在共。

現在のターゲットは専ら敏豪。

キャラへの質問

1. 出身は？

「・・・日本（なのです）」「・・・」

「・・・マジで？」

「マジなのです。父様が日本人で母様がイギリス人なのですよ？ただ、二人が日本で結婚して日本で私を生んだので、私は日本が出身ってことになるのです」

「・・・あれ？名字は？」

「普通なら父様の『夜裂』か母様の『ルナレイヴァ』なのです。けど、母様に問題があつてその名字に出来なくて、父様もそれを鑑みて、『リアフォルテ』になったと聞いたのです」

2・自分の取柄は？

「タイピングだな。一応10分で1000文字は打てる」

「スポーツが出来ること。勉強なんてできるわけねーし」

「・・・なんだろ、私の取柄って・・・？」

「ばいんばいんなおっp・・・むぐむぐ」

「それ放送禁止用語だからな！？取柄と思えねえし！！」

「というかそれが取柄って・・・やっぱりリーアフォルテさんってバカなんだね」

「ぶはっ・・・黙りやがれなのですちっばい」

3・得意科目は？

「「ない」」

「日本史・・・かな？」

「英語なのです」

4・好きな人（love的な意味で）は？

「いない」

「同じく」

「・・・敏豪君。これだけは絶対に譲れないもん」

「ダーリン以外にいないのです」

キャラ紹介なのです そのいちっ！（後書き）

ナタリアについての補足はここでさせていただきます。

今回は敏豪の苦悩と乙女の（醜い）戦いが勃発します。そして男子勢が悶絶します。別の意味で一樹が泣きます。

とりあえず3人目は確実に出すことにしました。4人目はアンケートの状況で決めます。

3人目は・・・お楽しみに。活発な咲夜華、毒吐きロリきよぬーなナタリアとは違う子です。

そのななっ！ (色んな意味で) 死にかけた敏豪、勃発する咲夜華VSナタリア

何で死にかけているのかは・・・その辺は察してください。『みせられないよ!』なことはないのです。

あの咲夜華にも不得手がある、ということが垣間見えます。

そのななっ！

(色んな意味で)死にかけた敏豪、勃発する咲夜華VSナタリア

あの朝、咲夜華とナタリアに盛大な告白をされてからというもの、俺は毎日が忙しいものになった。

親衛隊の奴らには追われるようになったし・・・なんか増えたし・・・

その結果・・・

「かゆ・・・うま・・・」

「・・・敏豪、お前、口からなんか出てるぞ・・・」

「し・・・ぬ・・・」

俺は絶賛、太陽光によって干からびたミミズ状態になっていた。仕方ないだろ、休まる場所が家しかないんだから・・・

そして、休まらない理由その2が・・・

「だーりん」

来た。突然告白し、そして俺を何故かダーリンと呼ぶ女、ナタリア

が。

「ダーリン、次は移動教室なのです。一緒に行きたいのです」

「だーっ！ひつつくな引っ張るな抱きしめるな！！止めてくれ鳥肌が立つ！！ついでに言つと暑苦しい！！」

何故暑苦しいかって？現在7月。上旬だけど夏真っ盛り。暑いのは当然だろ？

ナタリアはぐいぐいと腕を引っ張っている。あの告白以来、胸に着けていたコルセットは外して下着を着けたらしく、もろに当たって・

「だめーっ！！」

「にゅっ！？」

突然声が聞こえたなー・・・とか思ったら衝撃が。ナタリアが誰か・
・いやまあ、大体予想はつくけど・・・に突き飛ばされて、腕に抱きつかれていた俺もその反動で転げ落ちそうになつて・・・

「くぁwせdrftgyふじこーっ！？」

一樹の急所に俺の後頭部がクリーンヒット。・・・これは痛い。絶対痛い。しかし俺のせいではない。俺が休まらない理由その3が原

因だ。

「り、リーアフォルテさんなんか絶対！ぜーったい！敏豪君は渡さないもん！！」

「……ちっぱい……よくもやってくれやがったのです……」

「……ちっぱいじゃないって何度も言ってるよね？」

「……私から見ればお前もちっぱいに変わりないのです」

……もう言い争い。その3は咲夜華だ。もう仲が悪いとしか言いようがないくらいに言い争ってる。内容は専ら胸な気がするが。

「やっぱりリーアフォルテさんは胸ばかりに栄養いつてるんだね、そんなことしか言えないんだもん」

「そういうちっぱいは頭ばかりに栄養いつてるからちっぱいなのです」

足元には急所に俺のヘッドバットが決まって悶絶中の一樹、俺の両腕には只今絶賛言い争い中の『自称・榊敏豪の彼女』の二人。

「……どうしたもんかね、これ……」

鳥肌立ってるのに気付いて欲しい。しかし気付いてくれない。そんな悲しい状況に、なす術もなく振り回されていた……

時間変わって3限目。科目は体育(1-Aと合同)。男子は中でバレーか外で野球。女子は外で全員でソフトボール・・・なのは良いが。

野球をしていた男子、1-Aのやつらは全員授業にならなかった。
理由は・・・女子・・・の一部。

「・・・な、なあ、見るよあれ・・・」

「すげえ・・・ぶるんぶるんしてやがる・・・」

・・・ま、言わずもがな、視線はある一点に集中してる。咲夜華と
ナタリアの、だ。特にナタリアの方に凄く集中してる。

・・・仕方ないっちゃ・・・仕方ないんだよな・・・。今までは胸
にコルセットをして締め付けて小さく見せていたって話だから・・・

「こらお前ら、ちゃんと授業に参加しろ」

・・・うん、先生からお叱り。仕方ないね、うん。ちゃんとしてく
れて俺や嬉しいよ。

「いくら代永やリーアフォルテの胸が気になるっていつてもだな、
さすがに授業くらいはしっかりしろ。終わってからの報酬と思え」

前言撤回、最悪だこの人。

女子のソフトボールは、最早咲夜華VSナタリアの構図になっていた。投手はそれぞれ咲夜華とナタリアがやっていた。

咲夜華の投げる球は速度こそないが、コントロールに長けていて、毎度毎度エグイ所（ストライクゾーンぎりぎり）に投げていた。無論、打てるわけがない。見る限りインサイドぎりぎりだからだ。

対するナタリアはコントロールはぼろぼろだが、それを補う速度で投げていた。こっちも打てるわけがない。早過ぎるからだ。

「・・・ちつぱい、お前の球を最初に打つのは私なのです。今度こそ当ててやるのです」

「・・・絶対打たせないからね」

そして、打者ナタリアVS投手咲夜華という構図が三度出来た。今のところはどちらも打ててない。

「せえ・・・のっ!」

「・・・ここなのです!」

すかつ。

「ストライク」

「・・・今のはボールだったのです」

「完全にストライク。ギリギリだったけど私の目は誤魔化せないよ?」

「むー・・・」

そしてまた投げて、空振って・・・

「ストライク、バッターアウト。ついでにチェンジね」
「むう・・・」

とぼとぼ歩いてグローブを取り、マウンドへ。そしてその次の人目が・・・

「・・・というか、結局バトルなのです。今度は私が勝たせてもらうのです」
「ぜ、絶対に打つもん！」

完全に逆になった戦いになった。・・・こちらも状況は一緒。

「・・・という事で・・・死ぬがいいですっ！...」
「・・・！（キュポンー！）」

・
・
咲夜華は突然バットを横倒しにした。これが意味することはつまり・

こん。

「バント！？卑怯なのです！」

「打てばいいんだもん！打ったもん勝ちだよ！」

やはり策士的な方向では咲夜華に軍配が上がっていた。

ちなみに男子は・・・

「・・・だ、ダメだ・・・」

「あ、あの揺れる山を見てると・・・」

・・・はつきり言えば、とても体育をやれる状況じゃなかった。

「おーしー・Bメンバー、とつとつアウト取るぞー」

「OKー。とつとと取って啞然とさせてやるぞー!!」

「というか敏豪の嫁さん達をガッツリ見ているところなっぞって思い知らせてやるぞー!!」

俺？キャッチャーが一樹だったからとつとつバスバス投げてとつとつアウト取ってるけど？

つか「敏豪の嫁さん達」とか言っただやっ後でシバく。

昼休み。俺は授業終了のチャイムと共に教室から姿を晦ました。一樹には説明済みだ。逃げるためだと。そして俺は屋上に向かった。

二人には居場所を告げていなかった。いなかったのに……

「やっほ」

「……いたのかよ」

咲夜華がいた。まるで待ってたかのように。

「やっぱりお前がいんのかよ……」

「だって、敏豪君がいる所ってここか教室か図書館だもん、お昼食べるならここしかないと思って。あ、そうだ」

突然持っていた手提げ鞆をこそこそとして……

「えと……お弁当、作ってきたんだ。食べて……くれる？」

「弁……当？」

「……うん」

よく見たら咲夜華の手は所々に絆創膏が貼ってあった。で、開けてみたら……

「えと……その……初めて……自分以外の人のために料理したから……」

「……もしかして今まで作ってたのってトマト料理とか？んで殆ど包丁を使わないものだった？」

「う、うん……」

どうやら作るのは専ら具の少ないパスタものらしい。指に切り傷があったのはそのためか……

弁当箱の中身は、御世辞にも料理上手、と言えるような状況の物はなかったが、それでもおいしそうだった。

「……んじゃ、ありがたくもらうよ。……というかお前はどつすんだよ?」

「わ、私は自分の分も作ったから」

と、手提げ鞆をまたごそそとして、出てきた可愛らしい弁当箱。

「なら大丈夫だな。んじゃ、いただきま……」

「そつは問屋が卸さないのです!」

突然ドアが開いたと思ったら、ナタリアが登場。もうやだ……

「私だつてお弁当を作ってきたのです!!絶対そこのちっぱいより

おいしい……はずなのです!」

「なぜそこで詰まった!?」

「……私だつて初めて作ったのです……」

……ちくしょう、初めて女の子の手料理食べるけど……

どっちも料理初心者かよーっ!!

結果、撃沈したぜ・・・。咲夜華の料理は味が濃くて・・・ナタリ
アのは見た目ですらもうダメだった・・・味？ダメに決まってるだ
ろ・・・

「ちょっとー！敏豪君倒れちゃったよ！？絶対リーアフォルテさんの料理のせいだからね！？」

「何を言いやがりますかちっばい！！お前の料理が下手過ぎるのが悪いのです！！！」

・・・お前ら二人の責任だよ・・・！！

そのななっ！ (色んな意味で) 死にかけた敏豪、勃発する咲夜華VSナタリア

1-Aの男子共の行動は、分かると思います。そして1-Bのやつらは・・・もう、ね。いいやつらですよ。ノリ的な意味で。

次回は新キャラ増えます。前にも言いましたソロモン72柱の1柱です(悪魔はよく1匹2匹と数えることが多いかも、ですが、実際は1柱2柱とも数えるそうです。ここでは使い分けませんが)。さて、一体どの悪魔でしょうか？それはお楽しみに。

そのはちっ！ 臨海研修旅行の話と転校生（前書き）

新キャラが増えます！・・・さて、元悪魔は一体どの悪魔でしょうかね・・・？

そしてタイトルにある臨海研修学校はちょっとしたら出てきます。すぐには出てきません。

そのはちっ！ 臨海研修旅行の話と転校生

「ダーリン、嬉しい話とそうじゃない話があるのです」

突然抱きついてナタリアが切り出した。・・・いい話と悪い話？

「いい話から先にくれ」

「いい話は・・・再来週月曜から臨海研修旅行があるのです。盗み聞いた話によるとその間は異性交遊OKだとか」

「どこがいい話だ」

「私にとつていい話なのです」

「・・・で？他にないのか？」

「あとあと、転校生が来るとか。性別までは分かんなかったのです」

転校生・・・もしかしたらもしかしなくても・・・

「・・・どの道悪い話じゃねえかよ」

「あり？」

「で、悪い話つてのは？」

「夏休み明けに期末テストがあるとのことなのです」

「・・・悪い話しかねえ・・・」

俺はもう、机に突っ伏すしか取るべき行動がなかった。臨海研修旅行の異性交遊OKだと俺どうなる分かんねえし・・・転校生つった

ら俺が『面倒見る』なんて話になりかねないし・・・テストなんて死亡フラグじゃねえかよ・・・

そして朝のSHR。俺にとって多分決定的に疲れ果てると思う時間が来た。

「うーい、さっさと席に着けー。SHR始めるぞー」

そうして担任が入ってきた。ノリのいい俺のクラスメイト達は軍隊のように席に着いた。・・・はつきり言う、足並みが整っていた。

ちなみに咲夜華とナタリアは俺をはさんだ両隣りだったため、俺を挟んで火花を散らしていた・・・。俺、もしかしなくてもその内心筋梗塞起こしそうな気がしてきた・・・

「うーし、今日は連絡が何個もあるぞーまずは臨海研修旅行の話な
ー」

ナタリアの話通りマジであんのかよ・・・

「あー、臨海研修旅行の間に恋人同士になっても構わないが、節度
くらいは守れよー」

・・・そして異性交遊がOKとな・・・

「榊ー、お前もう付き合っちまえよー」

「そうだそうだー！お前も嫁さん二人いるんだからよー！！」

「ばっ、嫁って！？いねえよそんなん！！」

タイミングを見計らったかのようにいつもの冷やかしが入った。前

は別のやつだったのに……！畜生……

「あー静かにしろー。茶化すなら休み時間にしろー」

そしてアンタは止めないのかよー！

「んでテストの話もしくぞー。夏休み明けすぐにあるからなー。
範囲は……夏休み前に配る。面倒だから」

……安定のめんどくさがりあざーす。

「んで、最後の知らせだー。今日は編入生が来た」

「女ですか！？女子ですか！？それとも野郎ですか！？」

「お前らの期待通りだ、安心しろ」

刹那、クラス中が歓喜した。ただ、その内容が……

「よっしゃー！榊を思いっきりいじれるネタがキターー！！」

「いやいやそこは擁護すべきだろ！？少しずつ教え込んでいって……
だろ！？」

「どの道榊乙だなー！！」

・・・というもの。女子に至っても・・・

「榊君が頑張ってくれるから大丈夫だよね！」

「榊君優しいからねー」

「Mrハーレムだからねー、女の子には優しいからねー」

・・・誰も擁護してくれる人はいなかった・・・

「ダーリンを差し出すわけにはいかないのです!!」

「そ、そうだよ!! 敏豪君が何で女の子の面倒を見ないといけないの!?!? そういうのって委員長の仕事じゃないの!?!?」

・・・いや、一応いた。弁護にはなってないけど・・・

「とりあえず静かにしろー。うーし、入ってこーい」

指示に従うように、控えめにドアが開く。そして、チリンという鈴の音。

入ってきたのは銀髪が映える女子だった。編入生と言っても外国人っぽい。

「おし、自己紹介しろ」

「はい」

後ろで黒板に彼女の名前を書きながら自己紹介を促す先生と、それに返事をする女子。

「皆さん初めまして、本日付で編入してきましたルナ・ヴェイルフォールと言います。不慣れなところもあると思いますが、よろしくお願ひします」

流暢な日本語でしゃべるヴェイ・・・ヴェイルフォール・・・は恭しく頭を下げた。首に鈴付きのチョーカーをしていて、それがチリンと鳴っていたようだ。

・・・あれ？ヴェイルフォール・・・なんかどっかで聞いたことがあるような・・・もうちょっと違う聞き方で・・・

「・・・どうしよう、マジ美人だ・・・」

「・・・やべえ、これマジで誰かフラグ立てんじゃね？」

そついう会話がぼそぼそと始まった。・・・やめてくれ、そついう時は大概俺にフラグ立つから・・・

「つーことで榊、今日一日面倒見てくれー」

「なっ・・・!?」

突然振られ、俺は言葉を失った。・・・マジ!?

「フーことでSHR終わり。次移動教室だから遅れんなよー」
「ちょ、ウソだろ!?!」

・・・予想が当たった!! 嫌な予感ばかり当たるってこのことだったのか!!

「・・・ダーリン? 浮気したら許さないのでしょ?」
「浮気て・・・」
「・・・ダメだからね? 浮気・・・」
「・・・へいへい・・・」

この時点で俺はもう机に突っ伏すしかなかった。

ヴェイルフォールは『わ、私、迷惑だったかな・・・』と言わんばかりにおろおろしていた。・・・心配しないでくれ、ヴェイルフォールは無関係なのだから・・・

「あ、あの・・・榊・・・君・・・ですよね?」
「・・・ああ・・・」

「その・・・よろしく・・・お願い、します」

「・・・じちらじそ」

横から来る視線が痛かった。ぐさぐさと来るのが辛い。

そのはちっ！ 臨海研修旅行の話と転校生（後書き）

次回は・・・『ラッキースケベ羨ましいぞこのヤロー！』な回です。

この子は・・・一体何の悪魔でしょうか？ヒントは名字に。そこから推測できる人マジすげえ、です。

そのきゅっ！ ラッキースケベは唐突に！？（前書き）

今回も、「敏豪このヤロー！！」な回です。ついでに久しぶりに・
・ひっさしぶりに！！あいつらが出ます！ちょこつと。

徐々にフラグは立ち始めるものぜよ・・・

そのきゅうつ！ ラッキースケベは唐突に！？

1時間目が終わってから。つか1限目のときは俺と咲夜華とナタリアで面倒を見ることになった。元々俺が面倒を見ることになったのに、二人が「二人きりにさせたくない！」と断固拒否してこうなった。

「えと……次は……音楽……？」

「音楽室……確か……うわ、魔の階段地带通らないと遠回りになるし……」

「魔の……階段地带……？」

ヴェイルフォールが「何それ？」というふうに聞いてくる。仕方ないか、来たばかりだから知らないわけだし……

「……嫌な所だよね、あの階段……」

「絶対転びそうになるのです……。下手したらスカートの中見られちゃうのです……」

「えっ!？」

「……あの階段、傾斜が強いんだよね……。ふつう12〜3段なのにあそこだけ設計ミスってか17段あるんだよね……」

魔の階段地带……この西条東高校の存在する伝説として知られている、音楽室のある3階へと通じる階段。あの階段の怖いところは……女子にとっては段数の多い階段だからスカートの中が見られて

しまいかねない、ということ。共通している所というのが……

「……来た、魔の階段地帯……」

「え……と……これは……階段……なんですか……？」
「階段だ。やけに斜めった、な」

そう、1段1段の角度が90度じゃなくて60度なのだ。踏み場自

体に傾斜がついてしまっている。それでよく生徒が階段を踏み外したりして転んでケガをしているっつー話。

「どうやら私達が最後尾なのです。ダーリン、もし転んだ時に私たちを助けて欲しいのです」

「っーことは俺が一番最後に登れって……？」

っーことは……っーわ、俺上見れねえ……

「敏豪君、もしもの時は助けてね？」

「……わーったよ、どうにかするよ」

「お、お願いします……」

ナタリア、咲夜華、ヴェイルフォールの順で登っていく。俺は最後に全員が登り終わった後に登ることに……。やーな予感。

ナタリアが階段を上がりきり、咲夜華も登り終えた頃。ヴェイルフルはまだ半分も登っていなかった。やっぱり初めてだと怖いんだろな・・・

「ん・・・しょ・・・ひゃっ!？」

・・・今の声、まさか・・・

「だ、ダーリン！編入生が足を滑らせたのです!!」

「ど、どうにか・・・どうにか止めてあげて!!」

「とうるかちよつと待て!! 体勢的に無理だろ!？」

バランスを崩し、俺に向けて倒れてくるヴェイルフル。しかも・・・うつ伏せ・・・つまり俺と正面衝突する形で・・・

「きゃああっ!!」

「うおおっ!!!?!?」

衝突、そして一気に踊り場まで。・・・そしてついでに頭を打った。
・・・痛い。

「ダーリン、だいじょぶなのです!?!?」

「敏豪君! ヴェイルフォールさん!!」

・・・二人が声をかけている・・・少なくともヴェイルフォールには何もなければ・・・

「っ!?!?」

「・・・むっっ!?!?」

「あーっ!!!?!?」

「だ、ダーリンにな、何をしてるのです編入生!?!?」

・・・偶然。超偶然で。キスしていた。ヴェイルフォールと。・・・
やばい、鳥肌が・・・なんかもう、っーか寧ろ・・・

心臓が痛い・・・

俺は上に手を上げ、数秒助けを求めろが如く天を握って……その
まま……気を失った……

「ダーリン!! 気を失ったら負けなのです!!」

「ヴェイルフォールさん退いて！敏豪君気を失ってる！！」
「はひゃいっ！！！」

急勾配の階段をものともせずかけ下りてくる咲夜華とナタリア。凄
い勢いで降りてくる二人の気迫に圧され、すぐに退こうとしたルナ
だったが……

「あっ……っう……」

右足首を抑えて蹲った。

「編入生、もしかして足捻ったのです？」

「そ、そうみたい……です……いたた……」

さっきの転落の時だ。足を滑らした瞬間が悪かったらしく、捻った
らしい。

「……しょうがないのです。授業に遅れるのを覚悟して保健室ま
で連れてくのです」

「そうだね。事故だから仕方ないし、説明したらわかってくれるか
もしれないね」

咲夜華とナタリアが一階まで敏豪を下ろし、脚を捻ったルナにナタ

リアが肩を貸してゆっくりと一階まで向かい、そこから二人でまた敏豪を担いでいって、ルナはひよこひよここと保健室まで二人について言ったのだった。

「あなた達は授業に行きなさい。彼なら大丈夫だから」

「で、でも！」

「ダーリンに何かあったら私・・・」

「そんな大事に至ることなんてないから」

咲夜華とナタリアが保健室の先生ともめていた。理由は単純、敏豪のことである。残っているルナに何かしないか、とか逆に何かされないか、など、過剰に心配していたのだ。

「わ、私は大丈夫ですから・・・何もしませんし何もされませんか
ら・・・」

ルナの説得で渋々授業に向かった二人。・・・何となく納得はしていないのは編入したてのルナですら把握できた。

「ヴェイルフォールさんも、授業に行くのはちょっと様子を見てからにしてね。・・・ああ、そういえばちょっと用事があったので先生抜けるけど・・・いい？」

「ああ、はい。大丈夫です」

ルナを保健室に残して、先生は行ってしまふ。一人残ったルナは、ベッドで今も気を失ったままの敏豪を看ていた。

「・・・」

だが、それもほんの数分だった。突然顔を赤くして俯いたのだ。その理由は・・・

(お、男の人の唇って・・・柔らかかったんだ・・・はう・・・)

さっきのキスを思い出して・・・その感触をも思い出してしまったって、だった。

(・・・私ったら何考えてんだろう・・・!!)

頭をぶんぶんと振ってさっきのキスを忘れようとするルナ。けど忘れることは難しく。

「・・・あ、布団がずれてる・・・。直さなきゃ・・・」

歩くことがままならないため、立ち上がって奥の方の布団のずれを

直し始めるルナ。ただ・・・

「と・・・どかな・・・い・・・っ!」

片足でグーツと体を伸ばしているが、ぎりぎり届くか届かないかの位置。

「ちよつと動いて・・・んっ!!んんっ!!」

ギリギリ届いた!と安堵したその時だった。

「うわああっ!?!」

突然敏豪が飛び起きたのだ。運悪く体を伸ばしていた時だったため、案の定・・・

ふによん。

「ふひゃんっ!?!」

ルナの胸へと顔面ダイブしたのだった。その瞬間力が抜けたルナは敏豪の顔を覆うように倒れこんでしまう。結果・・・

「むぐぐうううっ！！」

見事に敏豪の呼吸する穴全てを塞いでしまうのだった。

「……あ、じ、ごめんなさいっ！！」

慌てて敏豪の上から飛び退く（とはいっても慌てて椅子に座り込むだけ）ルナ。

「……悪い、俺も飛び起きたから……」

「う、ううん……」

その後はお互い気まずい雰囲気が残っていた……

おまけその1

授業終了後のこと。

「だ

り

ん!!!」

シパンン!と、ドアを壊しそうな勢いでナタリアが飛び込んできた。少し遅れて咲夜華も入ってくる。

「な、何もされていないはずなのです!何もされていないですよね!？」

「何もしてないよね!?!そうだよね!?!」

「なにもしてないから!?!天地神妙に誓ってしてないから!?!」

「・・・!?!」

敏豪とルナは同時に否定。息ぴったりだったのが咲夜華・ナタリアの疑惑を深めているのには気づいていなかった・・・

おまけその2

「榊敏豪えっ!!今こそ貴様の息の根を止めてくれるっ!!」

変に巻き舌をして親衛隊が入ってきた。保健室にである。ルナはそれに驚いていたが、敏豪は「またか・・・」と言わんばかりに呆れていた。

「お前らなあ・・・ここ保健室だぞ？病人いたらどうするんだよ・・・」

「お前を殺す為なら無問題だっ!!」

そして乱入してくる親衛隊。しかし・・・

「だ、ダメですっ!!」

ルナが痛む足を押してまで立ち上がり、敏豪の前に立ちふさがった。

「退きたまえ麗しい姫君!!その害虫を排除しなければ我らが姫は解放されないのだ!!」

「害虫とか言うのはダメですっ!!それに、もし排除したら代永さん

が寧ろ皆さんを嫌いますよ!?!」

ルナの正論に親衛隊は「ぐう……」と言っしかなく、引き下がった。

「榊敏豪!今日はこれくらいで退いてやる!だがこれで済むとは思
うなよ!?!」

そのきゅうつ！ ラッキースケベは唐突に！？（後書き）

久しぶりに出ました親衛隊。キモさは如何でしょうか？ルナですら「姫君」と呼称するあいつら。そして相変わらず敏豪に対して敵視をし、あまつさえ「害虫」呼ばわりと来たもので。

次回はついに・・・！ルナの正体が明らかになります！・・・とはいつでも大体予測つく人はつきますけどね。

アンケート、まだ受け付けてます。内容は

1・4人目を追加すべきかせざるべきか

2・（追加すべきと答えた人は絶対）

その4人目は次のうちどつちがいいか

a・ゼバル（ソロモン72柱序列16位）

b・ハルファス（ソロモン72柱序列38位）

3・（これは自由・・・というか募集）4人目を追加することになった場合、そのキャラはどんなキャラがいいか（つまるところ設定です）

です。期間は今週の金曜日まで。日曜日辺りに発表します。

そのじゅうつ！ 明らかになった編入生の正体、追ってきたソロモン序列1位の
タイトルくっそ長いのは気にしないでください。

タイトルで分かると思いますが、バトル勃発します。相手は・・・
タイトルで見てください。

ついでに後書きで補足入れます。

そのじゅうつ！ 明らかになった編入生の正体、追ってきたソロモン序列1位の
ヴェイルフォールが転んで落ちてきたり咲夜華やナタリアがかなり
大袈裟に騒いだその日の放課後。

「・・・珍しく部活が休みになったし、今日は久しぶりに本屋でも
寄ってから帰るか」

咲夜華は用事があってさっさと教室を出て行ってしまい（かなり落ち込んでいたが）、ナタリアも買い物に行かないといけないとのこと
とで帰った。つまり、実質今は俺一人。

「・・・久しぶりだな、一人つてのも」

一人、商店街の方へと歩いて行った。この後、大変なことになると
は思いもしなかった・・・

「今日もいろんな事があつたなあ・・・」

帰り道、ルナはぼそつとそういうことを呟いた。編入生としてクラスに入った途端、いきなり騒ぎだしたクラスの皆。困っているよう

に見えるけど、優しく接してくれた榊君。その榊君が好きで好きでたまらないなんて言葉が似合うくらい榊君が好きな代永さんやリーアフォルテさん。いろんな事があつたな、としみじみ思った。

(でも、楽しかったなあ……。明日もまた、何かあるんだろうなあ……。)

そんな事を思いながら歩いていたらその時だった。

『……ようやく見つけたぞ、ヴァレフォール……。』
「っ!？」

突然聞こえた声に立ち止まって周りをきよろきよろと見渡すルナ。その顔には驚愕の色が。

『何故正体を知っているのかって顔をしているな……。?当然だろう?同じソロモン王に封ぜられた者同士なのだからな』

「あなたは……。誰ですか!？」

「……。ふん、この声を忘れたとは言わせぬぞ……。『盗賊公爵』ヴァレフォールよ……」

通りの陰からぬつと現われた男。一瞬ルナは誰か分からなかったが、自身の異名を言われ、ハッとする。

「あ、貴方は・・・『魔王』バエル・・・!?!」

細身の男を見て、怯えてしまうルナ。何せ、目の前にいたのは悪魔の中でも最上の存在、『魔王』バエルがいるのだから。

「ようやく思い出したようだな。・・・二度目の転生で性別を変え、三度目では威厳すら捨てた・・・嘆かわしいことよ」

「わ、私は・・・ヴァレフォールの血を引くだけの存在で、生まれ変わりなどでは・・・!」

「右脇腹。そこに右上の欠けたダビデの星があるはずだ」

「っ!」

自分が徹底的に隠してきた秘密をあっさりと的中され、驚愕が顔に浮かんでしまう。

「・・・やはりな。二度目の転生を果たした貴様に、我は心を奪われてしまった。盗賊公爵と呼ばれるだけあると思っただ瞬間だった。・・・さあ、我の妾となれ」

「い、嫌です!誰があなたと結婚なんか!」

足が痛むのを堪え、一步一步確実に下がるルナ。

「そうか・・・ならば・・・」

右手を空へと上げる。瞬間、その手に空間が湾曲したような球体が現れた。

「今一度・・・心を折られ我に服従するがいい！」

それをルナへと向けるバエル。

(あれは・・・闇の炎!? あれに当たったらいけない・・・!)

咄嗟に避けようとした・・・が、ここでルナに異変が。

「あっ・・・っっ・・・」

捻った右足を忘れて走ろうとしたため、転んでしまう。そして迫る炎。避けることもできず・・・

「きゃああああああっ!!」

闇の炎を直に浴びてしまう。そして吹き飛ばされてしまい、地面を転がる。

「無様だな、盗賊公爵。威厳どころかその動きすら失ったか」
「う……う……」

立て続けに闇の炎を浴び、転がされるルナ。最早されるがままだった。

(……誰か……助けて……！)

今のルナには、誰かの助けを願うだけしかできなかった……

「ちくしょー、売り切れって聞いてねえよ・・・」

欲しかったライトノベルは売り切れ、漫画も次回入荷が未定という散々な事態だった。

「・・・これ以上は何もないだろうし・・・ってなんだあの焦げ跡？」

遠目に焦げ跡を見つけた。しかも車が急ブレーキをかけたような跡じゃない。火を着けたその後・・・みたいな感じの。

『・・・ああ・・・っ・・・』

「・・・声？」

うつすらとだったが、声が聞こえた。それが誰のかは聞こえないが、何か大変なことが起きているのだらうと思う。画、下手にかかわる

のもの、と思った俺は放置することにした。

「・・・帰るか」

と踵を返した時だった。

「きゃああああっ!!」

突然目の前に人が飛んできた。・・・よく見ると・・・同じ学校の制服。所々焦げ、燃え尽きてか下着が見えている部分もあった・・・

「お、おい！大丈夫か!？」

同じ学校、ということだと思わず声をかけた。長い銀髪、真っ白な肌・・・もしかして・・・

「さ・・・榊・・・君・・・？」

「ヴェイル・・・フォール・・・!? 一体・・・一体どうしたんだよ!？」

「に・・・逃げ・・・て・・・」

ヴェイルフォールの口から発せられた「逃げて」の言葉。その意味

が分からずいた時だった。

「ほう……人間風情が此処にいるとはな……」

傲慢な、他人を見下したかのような声が聞こえた。

「てめえ……誰だよ!？」

「人間風情に名乗る名などないわ。我はその女に用がある。今すぐ消えろ」

さっきからアイツの言葉に混じっている『我』とかの偉そうな言葉。もしかしたら……

「てめえも悪魔か……!」

「……ふん、貴様のような人間が悪魔を知っているとはな……。落ちぶれたものだ、存在を知られるとは……」

やっぱり……そうだった……

「特別に名を教えよう、人間。我が名はバエル、ソロモン72柱の序列1位にして魔王。そこいらの一边倒の有象無象とは一線画す悪魔ぞ」

ソロモン72柱序列1位……こいつが狙っているのはヴェイルフオール……やっぱりそうか……!

「……ヴェイルフオール……お前はやっぱりソロモン72柱序列6位のヴァレフオールか……!」

「……」

ゆっくりと、だが確実に顔を背けた。その行動で分かる。当たり前だと。

「学友が悪魔、しかも序列6位という存在。絶望しただろう? そのような存在が学友とは思うまい?」

バエルは俺にヴェイルフオールの本性を告げる。明らかに異端視しろ、嫌えと言わんばかりに。しかし、俺は自分の中に怒りがふつふつと沸いてくるのが分かった。そのことを黙っていたヴェイルフオールにじゃない。俺が今キレたいのは……

「悪魔だからなんだってんだよ!」

「……?」

目の前の不遜な態度しかとれない野郎に、だ。

「ほう……？人間如きが我に意見するか」

「だ、ダメ……です……！逃げて……ください……！」

「……ヴェイルフォール、お前が悪魔だつて関係ねえよ。どんなやつだろうと、同じクラスのやつはクラスメートなんだからよ」

ヴェイルフォールに言い切る。俺の周りにも悪魔はいる。だが、普通に学生やっている。例えソロモンの悪魔だといつても、一人の女子なんだから……

「だから……」

「……む？」

ゆっくりと立ち上がる。そして……

「絶対に……ヴェイルフォールを守つてやる！テメエは……俺が殴つて二度とヴェイルフォールに近づけられないようにする……！」

バエルに盛大に啖呵を切つた。

「……面白い、人間風情が我に戦いを挑むか！」

バエルと対峙。やっぱり序列1位だけあつて威圧は半端ない。だが・

・ ・ ・ 負けられない ・ ・ ・ ! ヴェイルフォールのために ・ ・ ・ !

「テムエには ・ ・ ・ ぜってえ負けねえ! !」

「我に齒向かうこと、それ即ち愚といふことを、その身を持って思い知るがいい! !」

そのじゅうつ！ 明らかになった編入生の正体、追ってきたソロモン序列1位の

今回は敏豪VSバエル回です。ボロボロになっても立ち向かう敏豪に、ルナは何を思うのか？

アンケート、まだまだ受け付けてます。感想もお願いします！！

ついでに補足。

ソロモン序列1位のバアルは、バエルとも呼ばれており、今回はその呼び方を使わせてもらいました。「果敢、復讐、決意、高慢、野望、恥、感性、聡明」を司る魔王です。

ソロモン序列6位のウアレフォルはヴァレファールやヴァラファールなどとも呼ばれるため、ヴァレフォルという呼び方を使わせてもらいました。「盗賊公爵」の異名をもち、「格闘技、謀り、失意、悲しみ、物品の欠乏」を司る墮天使です。

そのじゅうちっ！ 人間VS悪魔 力強いしか弱き少女は何を思う（前書き）

今回は敏豪VSバエル回です。後で正式にタグを直しておきます。

「バトルあり」と。

あとルナの本性、「ヴァレフォル」についてですが、時々「ヴァルフォーレ」となっている個所が何箇所か見受けられると思います。完全にタイプミスなので、見つけたらご指摘ください。

そのじゅうちっ！ 人間VS悪魔 力強いしか弱き少女は何を思う

「だ・・・ダメ・・・！ 柎君・・・！ あなたじゃ・・・勝てっこ・・・ありません・・・！」

敏豪の後ろでルナがか細い声で制止をかける。・・・けど、敏豪は止まる気にはなれない。寧ろ、なるつもりがない。

「ぜってえ・・・殴ってやらあああっ！！！」

勢いをつけてバエルの顔面に拳を振るう。だが、それを片手ではじいたバエルは・・・

「愚かな・・・。無駄な足掻きと知るがよい」

はじいたその手で指を弾く。いわゆるデコピン。しかし悪魔、それも魔王の一撃は重く・・・

「がっ・・・！！！」

敏豪は軽く吹き飛ばされてしまう。地面に着いた所からまた転がる。

「榊君!」

「ふん、人間風情が出しゃばるからこうなるのだ」

吹き飛ばされて本来ならそこで諦める。それが普通の人間。相手が異形の存在なら、それに畏怖し、怯えてしまうもの。しかし・・・

「・・・誰が・・・これで諦めるかよ・・・!」

敏豪は立ち上がる。今の彼はクラスメイトを守りたいっていう気持ちだけで動いていた。

「・・・ほっ」

「っあああああっ!」

そうしてまた走って突っ込んでいく。

「無駄な足掻きを」

突っ込んでいってはデコピンで吹き飛ばされ、それでもまた突っ込んでいく。何度でも立ち上がっては吹き飛ばされ。

まるでボロ雑巾のように転がされ、各所から血を流し、埃塗れにな

りつつも立ち上がる。

ルナはそれをただ見ることにしかできないのが辛かった。今の彼女には彼を助ける力もない。二回目の転生の時にバエルと対峙した際に『辛うじてバエルを退けた』力もない。それが辛かった。

「まだ・・・まだあつ・・・!!」

「・・・人間、何故貴様は立ち上がり、我に齒向かう？」

「なぜつて・・・そんなの決まってんじゃねえかよ・・・！」

敏豪は口からプツと血を吐き出し、フラフラになりながらも立ち上がりバエルを睨みつける。

「クラスメイトだからに決まってんだろ!？」

「クラスメイト、か。たかがその程度の繋がりだろう?その程度の繋がりでは何故貴様は我に齒向かう?」

「その程度・・・だと・・・!?!?たかが繋がり・・・されど繋がり・・・だよつ!!」

敏豪はもう一度突っ込んでいく。それが無謀だと分かっているにも、今の彼を止めることなど出来ようか。

「・・・ふん」

今度ばかりは叩きつけるような雰囲気の一撃を放つバエル。しかし、今度は違った。

「うらあつ!!」

敏豪「が」振り下ろされた腕「を」打ち上げたのだ。魔王の一撃を込められた腕を弾いたため、既に右手は悲鳴を上げていた。それでもなお、敏豪は悲鳴を上げた右の拳を振るった。

「……つらあつ!!」

その拳はバエルの顔に一撃入れるには至った。が、当の本人の右手はもう、振るうこともできなくなっていた。

「……貴様……我に触れるか!!」

激昂したバエルは敏豪の腹部に一撃を入れる。敏豪にとってそれは普通の人間に殴られたそれよりも強い力で殴られたもので……

「あ……が……」

反動で呼吸困難に陥ってしまう。

「・・・」

私は何も言えなかった。「クラスメートだから」という理由だけで勝ち目もない相手に立ち向かう榊君に。

(・・・どうして・・・どうして悪魔の私のために・・・ボロボロになるの・・・?)

そして、榊君がバエルを一回殴った。・・・その直後・・・

「・・・っ!!」

榊君のお腹に重い一撃が決まってしまう。

「さ・・・榊君!!」

うづくまる榊君に、私はただ声を上げることしかできない。・・・辛い。これしかできないということが辛い。

「もう・・・もう止めてください!これ以上・・・これ以上は・・・榊君が・・・死んじゃいます・・・!!」

(私が・・・私が自分を捨ててしまえば・・・それで榊君が助かるなら・・・)

「私・・・あなたに・・・」

「・・・何を言われたかしんねえけどよ・・・!」

榊君がまた立ち上がる。そんなボロボロなのに・・・!

「悪魔だからって・・・誰かに運命を決められるもんじゃねえだろ
うよ・・・!!バエル・・・テメエがヴェイルフォールの行動を・・・
心を縛る権利なんて・・・ねえんだよ!!」

「・・・!!」

榊君の言葉に、心がとくとんと鳴ったような気がした・・・

「・・・興奮めした」
「なっ・・・」

目の前でバエルが言ったこの一言。あまりにも嘗められたような気がした。

「これ以上やり合っても無駄だ。我に貴様は勝てぬ。しかし貴様は我に歯向かい続ける。それに我は興奮めした、と言っているのだ」

バエルは踵を返す。

「ヴァレフオール。貴様は自由に生きるがよい。威厳も力も失い、ただの女となり果てた貴様に、我は興味を失った。好きに生きて好

きに死ね」

そうして、バエルは去っていった。

「……へっ……やって……やったぜ……！」

立ち上がったその直後、ふっと力が抜けてしまう。

「……つとと……」

「さ、榊……君……その……あの……」

横にいたヴェイルフォールが足を纏れさせて座り込んでしまう俺におずおずと話しかける。

「私……悪魔なんですよ……？それもメデューサとかサキユバスなんて目じゃない……ソロモン72柱の序列6位の……悪魔なんですよ……？なのに……なんで……」

「……さっきもいつたる？」

無理矢理だけど、笑顔で言う。

「クラスメイトを守るのに理由があるかよ？」

そのじゅうちっ！ 人間VS悪魔 力強いしか弱き少女は何を思う（後書き）

次回はこの戦いの後日話です。ルナをバエルの手から守った敏豪。

彼は一体どうなるのか・・・？ルナは一体どうなるのか・・・？このことを一切知らない咲夜華とナタリアは発狂するのか・・・（マテ）

アンケート、まだまだ受け付けてますので、感想にどしどし書いてください！キャラ案も貰えたら嬉しいです。

そのじゅうたっ！ 敏豪、自宅療養的謹慎。そして参戦、ヴァレフォル（前書
「そのじゅういちっ！」のその後の話です。それだけです。

そのじゅうにっ！ 敏豪、自宅療養的謹慎。そして参戦、ヴァレフォル

・・・朝、敏豪の家に行ったら敏豪は休むと言われた。

「ごめんねーちゃん。昨日敏豪ったら女の子守ってポッコボコにされちゃったから今日休まないといけないのよ」

「あいつらしいっちゃんあいつらしいっすね」

「それと、喧嘩しちゃったってことで連絡しないといけないのよね」

「そりゃ乙です」

・・・さて、と。敏豪が来ないことは分かった。問題は・・・あの二人だな。

「敏豪君休み!？」

「そんな・・・一体ダーリンに何があったのです!？説明して欲しいのです!！」

案の定、敏豪の嫁さん二人からの詰問を受けた。一番あいつに近い存在が俺だったから、というのが多分理由。二人の美少女にお近づきになれるのは嬉しいけどさ・・・さすがに怖い。

「敏豪は昨日よ、女の子守って喧嘩して、ポッコボコにされて今日自宅療養だってよ」

「・・・ダーリン・・・浮気なのです・・・明らかに浮気したのです・・・」

「いや浮気じゃないだろどう考えたって・・・。あいつ、正義感だけは人一倍強いからなあ」

そして、教室のドアが開いた時、またどよめきが起きた。

「ヴェイルフォールさん、どうしたのその顔!？」

「えと・・・昨日襲われちゃって・・・」

・ 助けた女子ってヴェイルフォールのことだったのか・・・

「助けてくれたのはダーリンだったのですか!?!?どうなのですか!?!?
はつきり教えて欲しいのです!?!」

「えと、あの・・・はい・・・」

俯いて、顔を真っ赤にして・・・あーあー、こりゃ確実にフラグ立
つてら。

「明日まで謹慎だなんて・・・お人よしもいい所よ？」
「・・・うっせ、お人よしとかじゃねーよ」

その日の夕方。ケンカをした、ということで一応の謹慎処分。女子を助けた、ということはあるもそこはちゃんとしなさいといけない、ということだったらしい。ついでに言うと病院に行ってきた、右腕ははつきり言うと骨に小さなひびが入っていて全治一週間くらいらしく・・・で、全身には軽い打撲があったらしい。打撲についても臨海研修旅行までには治るって話だ。

「明日も大人しくしてるのよー」
「わーってるよー・・・どうせやることもねーんだからよ」

右腕を吊った状態で部屋に一人いる俺。聞き手だから尚更辛かったりする。出来て精々本を読むこと。飯を食うのも難しい。

「さーって・・・明日は金曜・・・どうすつか・・・」

そう考えていた時だった。インターホンが聞こえたのは。

『はい・・・あら？どなたですか？』

・・・誰か知らない人が来たらしい。

「敏豪ー、昨日助けたって言う女の子が来たわよー」
「ヴェイルフォールが？」

・・・どうしてだ？あの時ありがとって言ったと思うけど・・・

『とりあえず上がってもらっわねー。部屋にだけどー』

「ってちよい待ってって！俺異性苦手なの分かってるだろー!？」

『問答無用よー?』

俺の意見は完全無視。そして、トン、トンという階段を上ってくる

音。母さんのようにどたどたしてこないから、明らかにヴェイルフ
オールの、だ。

そして、ドアがノックされる。控えめな音とともに。

「・・・入っていいぞ・・・」

『し、失礼・・・します・・・』

本当に謙虚な声で入ってきた。

「・・・あの、本当に昨日はありがとうございました」

「それはもう気にすんなよ」

「それと・・・私が悪魔だって言うのを知って・・・それでも・・・」

「当たり前だろ？クラスメイトなんだから、それがどんなやつだろ
うと変わりねーんだよ」

・・・そしてまた沈黙が。・・・やだよこの沈黙。

「・・・あの・・・榊君」

「・・・なんだよ」

「私・・・あなたのことが・・・好きになっちゃいました・・・」

「・・・は？」

「……えーっと、ヴェイルフォールの言っている意味が分からないんだけど？」

「昨日……私を身を呈して守ってくれたのに……不謹慎ですけど……ドキドキしちゃいました……」

「……」

絶句。……なんか嫌な予感までしてきやがった。

そしてその予感は、インターホンが現実性を告げた。

『あらあらあら！敏豪ー、また女の子よー』

(代永さんやリーアフォルテさんが来ちゃったのかな……！もし部屋に来ちゃったら……私、本気だって言えなくなる……)

突然の女子の来訪。大凡見当はついた。二人だ。

(……恥ずかしいけど……こうするしか本気って伝わらない……！)

「さ、榊君、失礼します！！」
「な、なむぐうっ!?!？」

「ダーリン、会えなくて寂しかったのです……って……」
「ヴェ、ヴェイルフォール……さん……!?」

部屋に入ってきた咲夜華・ナタリアが見たもの。それは……

「ん……」

「ん……!?」

口づけを交わし合っている部屋の主・敏豪とルナだった。

「ダーリン！何やってるのです！？ファーストキスどころかセカンドキスまで奪われるなんて末代までの恥なのです！！」

「ぶっは！待て！不意打ちくらってこうなっただよよ！！」

「でも！キスはキスなんだよ！？」

三人が言い合っているその最中だった。

「代永さん、リーアフォルテさん・・・」

ルナの声が聞こえたのは。

「・・・なんですか、編入生・・・」

「私、あなた達には絶対負けません・・・！！」

それは、宣戦布告だった。ルナの、咲夜華とナタリアに対する恋愛戦争の。

「絶対に・・・敏豪君の心を盗んでみせます！絶対に！！」

「わ、私だつて負けないのです！最終的には私が勝者になってやるのです！！私が魅了するのです！！」

「わ、私だつて負けないもん！・・・この中で胸一番小さいけど！」

「胸つて対立する所なのか！？」

今ここに、三つ巴の恋愛戦争が幕を開けたのだった……俺の鳥肌には誰も見向きしなかった……

そのじゅうにっ！ 敏豪、自宅療養的謹慎。そして参戦、ヴァレフォル（後書

次回は買い物回です。言い換えればデート回？あれ？そうでもない？

「（ナタリア）どっちかはつきりしてほしいのです」
うん無理。

「（ナタリア）酷いのです！！」

アンケートは×切りました。

そのじゅっさんっ！ ナタリア、抜け駆けデートで水着を買う（前書き）

ナタリアが行動します！いろんな意味で！！

そして咲夜華とルナの行動は・・・？

ルナの思わぬ一面が見受けられます。「ちょ、おま・・・」とかは無しで。

そのじゅっさんっ！ ナタリア、抜け駆けデートで水着を買う

金曜日。俺はまだ飯の謹慎中。右手が使えないから助かる謹慎だ。
・・・一週間かかるとはいえ・・・さすがに暇。

『敏豪ー、またナタリアちゃんよー』

・・・ナタリアが？なんでここに来た？咲夜華はいない、ルナ（あの日、ルナに「私も名前で呼んでください！」とせがまれたからそう呼んでる。・・・というかもしあのまま拒否っていたらOK出すまで抱きつかれて多分また気を失ってた・・・と思う）もいない。一人で来たらしい。・・・こりやまた二人が「抜け駆けだー」とか言い出すんだらうな・・・

「ダーリン！明日一緒にお買い物に行くのです！！」

ドアを開けてその第一声が・・・買い物？

「なんの買い物だよ？俺買うものねーぞ？」

「私の水着なのです！後服とか下着とかなのです」

「・・・水着い？お前、一回も海とか市民プール行ったことないのか？」

「ないのです！」

おい、そこ胸張ってきつぱり言う所じゃねえだろ。ただでさえ大きい胸がより大きく主張してるから。俺がもし変態だったら襲ってるぞ。

「だから一緒にお買い物に行きたいのです!!」

「・・・お前一人じゃ行けねえのかよ？」

「ダーリンと一緒にいきたいのです!!一緒にじゃないと嫌なのです!!死んじゃうのです!!」

「なんで俺にそこまで依存してんだよ・・・俺一応ケガ人なんだぞ?」

「ご飯も私が食べさせてあげるのです、気にすることは無いのです。だから、一緒に行くのです!!」

・・・こりゃ千日手になりそうな感じだな・・・あ、千日手ってのは将棋で同じ手が4回現れる現象のことな。

「・・・しゃーねー、今回だけだぞ?」

「嬉しいのです!ということ今回はお泊まりさせてもらうのです」

「・・・ちよつと待て、母さんに言ったのかそれ?」

「まだ言っていないのです。今から頼みこんでくるのです」

ととととと部屋を出て行った。・・・あの母さんのことだ、絶対許可出すと思っ・・・

『あらあらまあまあ、泊まりたいの？やっぱり？そのお荷物で分かったわよ？』

『・・・ダメ・・・ですか・・・？』

『ダメなわけではないじゃない、敏豪の将来のお嫁さんを止めないわけにはいかないからね。・・・ああ、その内ご挨拶に行かなきゃ・・・』

・・・おい。

「ちょっと待て母さん！俺まだナタリアのこと将来の嫁って認めてねえぞ！！」

『何言ってるの！あの子たちだってあんたのこと好いてんでしょ？一人くらい目星付けとかなきゃ！』

・
目星付けるも何も・・・さっきから「ダーリン」って言ってるだろ・・・

「ダーリン！今日は一緒にお泊まりなのです！！イチャイチャするのです！！」

「しねえからな！？俺の現状見て言え！！」

抱きつこうとするナタリアを左手だけで押さえる。身長差もあつて手が空中をばたばたするくらい。

そしてナタリアは飛びつくの諦めた。・・・つか常に飛びつくの

を諦めてくれると嬉しい。・・・今でも鳥肌立った。我慢したけど・・・寒気がしたから。

「ううゝ・・・ダーリンのいけずゝ・・・」

「バカ、俺たちちやまだ高校1年だぞ？んなことしてたら世間一般に何言われるやら」

「ダーリンとなら何言われても気にしないのです」

「・・・俺が気にするから」

その日の夕食、母さんから「今日はベッド軋ませてもいいのよ」と言われてめちゃくちゃ焦った。・・・一体この人はどれだけ寛容なんだか・・・それとも世間知らずと言っべき？

「・・・髪の毛は・・・よし。跳ねてない・・・服も乱れてない・・・
ちよつと派手だったかな・・・」

私は今、敏豪君の家の前にいる。お買い物に誘おうと思って来た。
買い物は・・・水着。今度こそ泳げるようになるんだ！

「・・・よし！」

意を決して私はインターホンを押す。ピンポンという音が鳴って、
敏豪君のお母さんが数分後に出てきた。

「はいはい、あらあらまあまあ咲夜華ちゃんじゃないの。どうした
の、こんなに朝早くに？」

「えと、敏豪君と一緒に買い物行こうかな・・・って」

「あらそう・・・ごめんねえ？もう出ちゃったのよ」

「そうですか・・・」

しょぼんと落ち込む。だって、いないんだもん・・・

・・・でも、そんな気持ちは、次の一言を聞くまでだった。

「ナタリアちゃんが昨日来て、今朝8時に出てったから」

「リーアフォルテさんが来たんですか!? 昨日!？」

「ええ。泊まってくーって言ってたわ。娘が出来たみたいで嬉しかったわー」

「……まさか……ううん、もしかしくなくても……抜け駆けされた……!？」

「あ、ありがとうございます!そ、それで、行き先とかは……」
「駅前のショッピングモールに行く、って言ってたわね。もしかして追いかけるの?」

「はい!抜け駆けされちゃったので!」

「あらあら……あの子も隅におけないわねえ。気をつけてね?」

「ありがとうございます!!」

私は慌てて駅前のショッピングモールへと走っていった。

途中、ルナちゃん（リーアフォルテさんと違って仲良くなって、お互いに名前呼びしてる）と会って、二人で駅前へと走っていった。

・・・ルナちゃん、やっぱり胸大きいなあ・・・羨ましい・・・

「ダーリン、私の水着を選んで欲しいのです」
「何言ってるんだよ・・・」

半ば拉致的な感じで連れてこられた駅前のショッピングモール。その水着売り場の前に俺とナタリアは立っていた。

「やっぱりダーリンに選んで欲しいのです。選んでくれないと私、スク水で臨海研修旅行に行かないといけなくなるのです。衆人環視の恥さらしになっちゃうのです」

「別にスク水でもいいじゃねえかよ。泳げない、ってこともないだろ？」

「スク水はダーリンの前じゃないと嫌なのです！」

・・・どんなポリシーだよ・・・

「・・・わーったわーった。こんな言い合いでメビウスの輪してたら日が暮れちまうからさっさと選ぶぞ」

「ありがとうございます！！」

と言つて抱きつく力を強めやがる。今も実は鳥肌我慢してるんだがこれ以上強く抱きつかれると膝が笑うんだけど・・・つかすっげえ柔らかいものが当たってるんですけど？

「・・・ダーリン？」

「・・・なんだよ」

「もしかして、私のおっぱい気になってるのですか？」

「・・・気にしてねえよ」

「やっぱり気になってるのです。間が物語ってるのです」

・・・そりゃ、俺も男だから気になるっつもの・・・

「ちなみに、おっぱいが当たるのは必然なのです。抱きついてるのですから」

・・・だろっつな畜生・・・

一方、ショッピングモール急行中の咲夜華とルナは・・・

「ま、待って、くださ・・・げほっげほっ!!」

「る、ルナちゃん!?大丈夫!？」

「わ、私、う、運動オンチなんです・・・」

ルナが息切れを起こし停滞していた。とりあえず駅は見えたが。

「ダーリン、私にどんな水着を選んでくれるのですか？」

「・・・まずお前はどんなのがいい？そこから選んでやるから・・・」

「わかったのです」

とててーと売り場の中に入っていくナタリア。・・・さて、俺も時間潰しに水着売り場見てみっかな・・・。・・・男物の。

「・・・つ、着いた・・・はふう・・・」

「ルナちゃん・・・ホントに大丈夫？」

「だ、大丈夫です・・・咲夜華ちゃん・・・」

二人は漸くショッピングモールに着いた。咲夜華は軽く肩で息をしている程度だが、その横のルナは息絶え絶えといった状態だ。

「敏豪君・・・まだいるかな・・・？」

「いてくれると・・・嬉しいですけど・・・どうかは・・・分かりません・・・」

「歩いてこっか？その方がルナちゃん的にもいいと思うけど・・・」
「・・・は、はい・・・す、すいません・・・」

ショッピングモールへと入っていく二人、あの時の慌ただしさはな
りを潜めたが、それでも焦りは残っていた。・・・顔に。

「だーりん」

「うわっ!?!?・・・何だ、ナタリアか……。とりあえず離れてく
れ、鳥肌が立つ……。」

「や、なのです。水着選んだので見て欲しいのです」

どの道離れてもらうけど、見たら……

「お前なあ、衆人環視でスク水が嫌つつって紐はOKかよ・・・」
「・・・あ、間違えたのです」

・・・間違えた？

「これは・・・ダーリンと夜のお楽しみの方に使ったつもりだったのです」

「却下な」

「ぶー！」

膨れっ面しても無駄だ。んなエロいもん着てみる、俺は速攻で嫌う。
・・・第一嫌なんだよな・・・

「じゃあこっちなのです」

見せたのは一般的な黒のビキニ。隠す面積も広い。

「いっぺん試着してみたらどうだ？サイズが合わなかった、なんてことになったら涙目だぜ？」

「そうするのです。ダーリン、試着室の前において欲しいのです」

試着室のカーテンが閉まり、ごそごそという音が聞こえる。・・・
あの水着だから大丈夫だと思う。・・・つかつけ方知らんとか言わ
ないよな・・・？

「だーりん・・・」

「なんだよ？」

「着け方分かんないのです・・・」

「・・・待て、「冗談だよな？」」

「マジなのです・・・」

・・・どうするべし？ナタリアが頼れるのは俺しかない。・・・
とかいって俺が中入るのは憚られる。

・・・などと考えていたら。

「敏豪君見つけた！！」

・・・聞き覚えある声・・・じゃない、絶対聞いた声だ。聞き慣れ
た声でした。

見たら・・・咲夜華がいた。よく見ると、ルナまでいた。

「・・・お前ら、一体何がどうしたってんだよ・・・」

「だって敏豪君がリーアフォルテさんとデートしてるって敏豪君の
お母さんが！」

「……デートじゃねえって朝口を酸っぱくしていったのに……
何で曲解してんだよ」

めんどくさいことになっていたら、まだ解決していないことがあつた。それは……

「誰でもいいので水着の着け方を教えて欲しいのです……」

……ナタリアのことを忘れていた。

「誰か知ってる？」

「海行つたことないから分かんない……」

「私も同じです……」

「……だそうだ」

結局咲夜華に頼んで店員呼んできた。一番楽な方法だと俺は思ったね。

まあ、結局二人の水着も選ぶことになったんだけど……それはそれは面倒だった。自分の好みで合わせりゃいいのに……

ちなみにこの後、咲夜華とナタリアが空いている左腕に抱きつこうと散々揉め、ルナがちゃっかり右腕の何ともない部分に抱きついていた……もう面倒なのでさっさと帰ることにしたし。

そのじゅっさんっ！ ナタリア、抜け駆けデートで水着を買う（後書き）

次回から！臨海研修旅行編！スタート！

今回はその1です。バスの風景、降りてから部屋の中までです。久しぶりに咲夜華VSナタリアが見られます。ちょっとだけ。

（結果発表）

アンケート結果です。

1・・・総数3票。

内訳・・・増加2票、却下0票、保留1票

結果・・・増加。

2・・・総数1票

内訳・・・ゼバル1票、ハルファス0票

結果・・・ゼバル。

3・・・これはアンケートというより募集です。

「勝気・自尊心が強い」というのをいただきました。

結果は以上です。

とりあえずゼバルを増やします。設定についてはちょっと付加して・

「幼馴染。普段は勝気で自尊心が強いツン。だが二人きりになると途端にデレる」

とします。土曜の間に考えました。ちなみにこの子については敏豪・一樹も正体を知っているという設定も、です。

そのじゅっよんっ！ 臨海研修旅行！その1 到着！」「一樹（遊ばねえのっ

臨海研修旅行編です！新キャラ？ないない。そんな話です。バトルは・・・あつて精々女の戦い？

というか早速勃発してます乙女のプライドをかけた（？）戦い。そしてちゃっかりな娘も。

そのじゅっよんっ！ 臨海研修旅行！その1 到着！」（一樹）遊ばねえのっ

「・・・敏豪、お前嫁さんの隣じゃなくて良かったのか？つか男同士で座るってのもどうかと思うぞ？」

「・・・気にするな、俺は気にしない」

「気にしろよ」

バスの中。俺は最後列二つ前で一樹の隣に座っていた。もちろん窓側。それ以外に座ってみろ、途端に席の取り合いだぜ？そんなめんどっちいことできるか？出来るわけねえだろ？

「ったく、お前の女嫌いはここまで深刻だったとは驚きを隠せないな。いつまでもそんなんで大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

「そう返すな、バカ。お前はあれか？トシノツクか？」

中学の頃赤点ラインぎりぎりで良くここ入れたなって言われたお前にだけは言われたくないな、バカとは。つかトシノツクってなんだよ。

「っ」

「むっ」

「・・・（ぶっ）」

「・・・ほれ、後ろを見てみる。お前の嫁さん達がむくれてっぞ？」

・・・知らん。乗り込もうとした瞬間に腕と腰が外れそうになったんだ、これくらいしとかないとまた暴走しかねないから。

「お前って将来亭主関白になりそうだな。主に生活面で」

「知るか、俺は寝る。着いたら起こしてくれ」

「へいへい、分かりましたよーっと」

嫌な予感はしなくもないが、寝ることにした。

「……さ……きて……さい……」

……ん……？誰の声だ……？

「としひ……起き……くださ……!!」

……ルナの声……？

「敏豪さん、起きてください!!着きましたよ!？」

「お、おお、わ、わりい……。つか一樹は？あいつに起こせて頼んだんだけど……」

「えと、桐生君は私に「敏豪頼んだ!」って言ったつきりバス降りちやいましたけど……」

……あいつ、一度殺す……!

「で、咲夜華とナタリアは？あいつら一番にそういうのに乗っかり
そうなんだけど」

「外で対立しちゃってます……。さっきなんかほっぺの引っ張り
合い始めちゃって……」

「……なんとなく分かる気がする。……つか聞こえてきたよ、そ
の声。」

「ちょ、咲夜華！落ち付いて！！分かるよ！？負けてるのは分かる
けど！」

「ナタリーも落ち着いて！！煽っちゃダメだよ！」

「離してよ咲子！！一度リーアフォルテさんとは決着をつけないと
いけない気がするの！！女の子として！！」

「離してほしいのです美夏！！一度あのちっばいには身の程を知ら
しめないといけないのです！！」

……三崎屋、時津、悪い……

「でも、おかげで私、得しちゃったんですけど……」

「ん？何て？」

「気にしないでください」

言うや否や、腕にギュッと抱きついてきた。……待ってくれ、鳥

肌が立つ……

「……ルナ、離れてくれ……」

「……え……?」

「……咲夜華から聞いてねえのかよ、俺異性嫌いだって……」

「えーと……咲夜華ちゃんからは何も……」

意外と腹黒いんだな、アイツ……

「でも、異性嫌いはその内直さないとダメですよ?」

「んなこと分かってっけど……」

結局抱きつかれたままバスを降りる。降りたそのすぐ左側で咲夜華が三崎屋に、ナタリアが時津に羽交い絞めされていた。

「で、お前は結局嫁さんと一緒の部屋にしようって言う決意は持たなかったってわけね」

「当たり前だ、あの三人と一緒にの部屋になってみる、翌朝起きたら生徒が死んでた、なんて話があったらどうするよ？」

「んー・・・ヴェイルフォールはないと思うが・・・リーアフォルテとかその辺はあり得そうだな」

「一体何がどうしたのやら、というのには察してくれ。なんとなく分かるはず。というか今日の夜ですらもう怖い。」

「で？お前はどうすんの？」

「寝る」

「よし分かったお前も着替えて行くこうじゃないか、バラダイス楽園へ！」

「だが断る！！！」

「ちえー、つまんね。まーどうでもいいけどな。どの道お前は連れてかれっから」

・・・は？

「ちょっと待て一樹、お前、それどういう意味だよ？」
「言った通りの意味。それ以上それ以下の意味はねーよ」

・・・もうこの時点で怖くなった。俺、臨海研修旅行休んだ方が良かったかも・・・つかバエル！なんで腕折ってくれなかった！？そうすりゃ臨海研修旅行休めたのによ！！

そのじゅっよんっ！ 臨海研修旅行！その1 到着！」（一樹）遊ばねえのっ

次回はその2です。久々な吸血シーンがあります。・・・書いててなんて可愛らしいのか・・・と思ったくらいですけど、やってることはグロいんですよ・・・。血、吸ってるから・・・

ちなみに敏豪が言っていた「生徒が一人死亡」。これが何を指すのかは・・・それぞれの妄想で補完してください。ifだったら・・・書こうと思えばかける、そんな話です。なお、ここでは掲載できません。

そのじゅっ！ 臨海研修旅行！ その2 あれ？なんか右腕が重いぞ？血を

タイトルが長いのはご愛嬌。

久しぶりに咲夜華が敏豪の血を吸います。ま、そこまで激しく吸血
することはないので、安心してくださあ。

そのじゅっ！ 臨海研修旅行！ その2 あれ？なんか右腕が重いぞ？血を

「……ん……」

目を開ければ、何か違和感を感じる。右腕が重い。何か乗ってる・
・？いや、抱きつかれてる……!？

何故だ、と思つて横を見たら、案の定だった。

「咲夜華……お前なあ……頼むから抱きつかないでくれつての・
……」

咲夜華が抱きついて寝ていた。……つかいつの間に来たんだ？

「……やべ、抜けねえ……」

腕は完全に抱きつかれていて動かすことままならない。というか挟
まれてる……。大変な所に。動かしたら動かしたで大変なこと
になりそうなため動かせない、と言つた方が正しいか？そんな感じ。

「……う……ん……」

抱きつかれるのも辛い。けど動かせないのも辛い。どろすりゃいいのこれは……

「としひでくん……すきい……」

……寝言で告白って……まあの時既に盛大な告白されたけど。どうすつかねこれ……ナタリアとか来たらどうすんだ？

咲夜華的な意味の好きは「LOVE」の意味もあるだろうし、血の嗜好的な意味での「LIKE」もあると思う。

「ん……ふに……」

……なんかそもそも始めてたんですけど？なんか腕が擦られてんですけど？太股に。特に太股に！！俺が変態だったら今頃大変なことになってるぞ！？明らかに誘ってる感じするから！！

「咲夜華、起きろ」

「ん……やだぁ……」

一応起こすけど半分寝てる。

「起きろって」

「うー・・・もっといっしょにいるう・・・」

今度はもそもそと動いた、と思ったら・・・胴体に来た！ちよ、それ以上は止める！！

「としひでくん・・・」

起こす為に横になってた所に抱きつかれたから、俺の前っ側に咲夜華がいる状態。女子特有の甘い臭いが鼻にくる。・・・これがまた、苦手なんだよな・・・

「としひでくん・・・」

だから甘い声を上げるな！息が掛かって寒気がする！！

「いただきますふ・・・」

は？

「あー・・・」

かぶ。

ちゅー・・・

「って吸うのかよ！・・・ああああ
」

・・・だんだん・・・気が・・・遠く・・・な・・・って・・・

「ダーリンがいないのです……。せつかく水着に着替えても意味
ないのです……」

「咲夜華ちゃんもいないですし・・・どこ行っただんでしょうか？」

二人が海岸を歩きまわっていた。ルナはさすがにパーカーを羽織っていたが、ナタリアは水着のままだったので、周りの男子の目をくぎ付けにしていた。その通過後では見入っていた男子に女子が抓っていたりするなどの光景があったりなかったり。

「・・・そうだ、ダーリンの友達に聞けば万事解決なのです」

「・・・すっかり忘れてました」

ナタリアがダーリンの友達・・・つまり一樹を思い出した。ルナは忘れてたことを申し訳なさそうにしながらも次いで言う。

「聞きに行くのです。行った先にあのちっばいがいるかもしれないのです」

「咲夜華ちゃん・・・何してるんだろ・・・」

その頃の当のダーリン（敏豪）は・・・

「・・・（ちうちうちうち・・・）」

完全に気を失い、未だ咲夜華にちうちう血を吸われていた。ただちに貧血になるような勢いではなく、ちびちびと飲んでいくため即死になっただけはしないが・・・

傷の化膿の可能性、という問題が出てきたのは言うまでもなかった。

「へ？敏豪がどこ行ったかかって？」
「そうなのです。さっさと教えやがれなのです」

一樹の所に来ていたナタリアとルナ。なんか偉そうなナタリアと申

し訳なさそうなるルナは、対極的な感じがしたが、変な感じはしなかったと周りは後に語る。

「あいつなら部屋で寝てるぜ？遊ばねえのって聞いたたら『面倒だ』とか言っつてすぐ寝ちまった」

「分かったのです、感謝するのです」

「桐生君、ありがとう」

「別にお礼とか言われるもんじゃねえって。敏豪の嫁さんなんだから、その辺のカバーはしてやらねえと」

この一言にナタリアは「当然なのです」と言わんばかりに頷き、ルナは湯気が出る勢いで顔を真っ赤に染め、俯いた。

「じゃあ行ってくるのです！編入生、行くのです」

「え、えと、その、じゃ、じゃあ・・・」

「頑張れよ、色々とー」

一樹の最後のからかいにも顔が真っ赤になるルナであった。

「・・・一体何してやがるのですちっばい」
「さ、咲夜華ちゃん・・・ずるいよ・・・」

・・・四面楚歌。目の前にはナタリアとルナが。ルナ、なんとなく言うけど顔赤いぞ。

ちなみに口はもう離れている。吸ってないから俺の意識が戻った。ついでに意識が戻ったのは二人が来る一分前・・・くらい。

「・・・寝てる？」

「ダーリンが言えば納得するのです。けれど、ちっぱいの行動は理解しがたいのです!!！」

「正直なところ？」

「羨ましいのです!!！」

・・・わーお、断言した。隣でルナもコクコク頷いてるし。・・・
なんとという面倒な事態に？

「というか咲夜華！いい加減起きろ!!！」

「ふに・・・やー・・・」

「やー」て・・・

「だったら私だってダーリンとイチャイチャするのですー!!！」

「え、えと、その、あの・・・ご、ごめんなさい!!！」

なんとナタリアとルナまで抱きついてきやがった!?しかもナタリアのヤロー思いつきり「ドーン！」と感じて凸してきやがった!!！」

「ダーリン・・・あったかいのです・・・」

「・・・暑い・・・」

「・・・」

前には咲夜華、後ろにはルナ、上にはナタリア・・・そして下は床。

俺、ホントに今日死にそう・・・

そのじゅっ！ 臨海研修旅行！ その2 あれ？なんか右腕が重いぞ？血を

次回。水着回！！一応！！！海といたらこれだろうと言わざるを得ない、水着回！！一応！！！

大切なことなので、『一応』を二度言いました。

とりあえず、想像して2828してください。必死になって「泳ぎを教える」とせがむ三人を。上目遣いでせがむ三人を。敏豪を自分に置き換えて、妄想してみてください。これ、次回までの予習です（マテ）。

そのじゅじゅくっ！ 臨海研修旅行！ その3 海に繰り出せ、遊べ、そして帰
臨海研修旅行編その3です！今回はトラブってしまう回です！主に
敏豪が。

ま、だからこいつはモテるんだ、というのが証明される回でもあり
ますね。

そのじゅづろくっ！ 臨海研修旅行！ その3 海に繰り出せ、遊べ、そして泳

「……結局俺は外に連れ出されるってわけか……。一樹の言うてた意味はこれ……」

俺は今、絶賛砂浜で干乾びたいと思った。今すぐにも干乾びることが出来たら、俺はすぐに涼しい部屋に戻る。なのに、こういう時に限ってそういうことにならない。増して熱中症なんかならない。……暑いのに。抱きつかれて暑いのに……

周りの男子は大半が妬みの視線を向けてきやがるわけで。ちなみにそれ以外……つまり1-Bのやつらの視線は「あらあらまあまあ」とか「見ました奥さん？」「ええ、見ましたわ、初々しいわね」とか言った感じの視線。畜生ム力つく。

ちなみに俺の右腕には咲夜華が「絶対に離さないもん」と言わんばかりに抱きついていて、左側にはルナが競り合うように抱きついていて。なんとなく必死っぽい。そして真正面にナタリア。全員水着になっているわけで……

その、あれだ。当たってるんだよ。「象徴」が。

「あ、あのね、敏豪君。私に泳ぎ方教えてくれないかなあ……。？
ダメ……。？」

「ダーリン、泳ぎ方を教えてほしいのです……」

「あ、あの、お、泳ぎ方、教えてくれませんか……。？」

「・・・あのな、俺は一人なんだぞ？三人同時に教えられるかっての・・・」

俺が必死に（拒否のための）弁明をしても返ってくるのは上目のおねだり。しかも全く同じ内容ときたもんだ、どうしろって言うんだよ・・・

・・・ついでに、俺の頼みの綱だと思っていた一樹はというと・・・

「・・・おおお・・・ここは樂園か・・・!?!?」

「た、隊長、俺、もう死んでも構いません・・・!?!」

「馬鹿者、ここで一人落とすまで死ぬのはまかりならんぞ！」

「は、はいっ!?!」

・・・なんか他の男子とつるんで軍隊的なことをやっていた・・・ここであいつらに春来んのかは正直不安・・・つかまず無理かも。だって・・・あれ引くぞ？俺がもし女だったら・・・

「敏豪君・・・」

ふに。

「敏豪さん・・・」

ふにゆ。

「だーりん……」

むじろ。

「……」

「……どうすりゃいい？俺は早く自由になりたい。なのに左右+前から抱きつかれてるからどうしようもない。」

「……とりあえず離れてくれ。話はそれからだ」

「うん」

「はい」

「わかったのです」

三人がそれぞれの返事で離れた……その隙を見計らって俺は逃げる！！

「俺を少しくらい自由にさせてくれ！！」

「あっ！！」

「逃げたのです！ダーリンのイジワルなのです！！」

「う、海に走って……」

「……そう、泳げないことを知ってて俺は海に逃げた。準備運動？する暇ないからそのまま行く！！」

「……ダーリン酷いのです……」

「私達、泳げないのに……」

「うー……!」

……さーて、後は自由に泳ぐd……嘘だろ!? 咲夜華がこっちに近づいてきてる!??

「泳げるようになるもん……! 絶対に泳げるようになるんだもん!」

海にざぶざぶ入ってくる咲夜華。……おいおい、泳げないのに無理すんなよ……

「……えいつ!」

突然海に飛び込みよった。……泳げないやつがそんなことするわけだから当然……

「た、助け、わぶつ……たす……」

当然、というか案の定溺れる。……まったくもって面倒なことになっただ!!

「ちょっと待ってる！」

溺れてる咲夜華の所まで慌てて泳ぐ。・・・こういつ時に女性嫌いとか言われてられっかよ！！

「ぷはっ！！」

「けほっ・・・けほっ・・・！」

咲夜華を抱きかかえて浮上。・・・たく、面倒なことをしてくれ
たよ・・・！

「・・・たく、大丈夫か？」

「・・・けほっ・・・敏豪君が悪いんだよ・・・」

・・・あのなあ・・・

「・・・だから・・・もうちょっとこのままでいさせて・・・？」

「・・・正直、鳥肌が立つんだけど」

「ダメ」

拒否権はなかった。・・・というか最早決定事項となっていたらしく、俺に安寧はない、ということらしい・・・

「ちっばいーっ！！一人だけ何やってやがるのですかー！？」

砂浜からナタリアの怒声が聞こえた。・・・動こうにも咲夜華が抱きついていて動けない。なにせ、片腕封じられてるから・・・

そのじゅづろくっ！ 臨海研修旅行！ その3 海に繰り出せ、遊べ、そして溜

とりあえず敏豪がモテる理由、判明しました。底抜けに優しいんです。口では嫌だと言っているも。なお、咲夜華を砂浜まで連れて行っている間、彼は鳥肌立っていました。一応補足です。

次回は「おい、ちょ、待て、夜だからって……」と思わず言いたくなる回です。あ、ナタリアは出遅れますよ？

あと、そのうち一樹にも相手を作るつもりでいます。もち、悪魔で

そのじゅうななっ！ 臨海研修旅行！ その4 夜這い、翌朝大絶叫のナタリア

タグを追加した今回。咲夜華とルナが大胆な行動に！？

そしてナタリアは・・・！？何が起きたかは本編でっ！

そのじゅうななっ！ 臨海研修旅行！ その4 夜這い、翌朝大絶叫のナタリア

咲夜華が溺れる事故の後、絶対に離れたがらない咲夜華、それに対応するかのように腰に抱きついてきたナタリア、後ろでおろおろするルナに囲まれ疲弊した敏豪は、夕飯を食べて入浴し、その後は・
・睡眠に負けた・

「・・・お前、本当に寝るの早いな・・・ま、あんなことになっちゃしゃーねーけど」

呆れたように敏豪を見る一樹。しかし彼の眼はある計画実行のために燃えていた。

敏豪・一樹の部屋から離れた3215号室。ちなみに敏豪達は3204号室。泊まっているのはなんと・・・ホテル。意外と西条東高校は金持ち高校だったりするのだ。

「不条理なのですーっ!!」

その部屋で突然大声を上げたのはナタリアだった。理由は簡単・・・

「なんでダーリンと一緒に部屋になれないのです!?!男女別なのはおかしいのです!!」

「し、仕方ありませんよ、男女が一緒に部屋になって間違いがあったら学校が責任を取らないといけないんですから」

「それを取っても、やっぱり別々は嫌だよね」

「ちっばいと同じ意見なのは釈然としませんが今回ばかりは本当に憤ってるのです!!」

頬を膨らませてご立腹なナタリア。咲夜華も不本意ながらもどこか釈然としないといわんばかりに不満を漏らしていた。

ただ、ルナだけは何も不満を言っていないかった。

「……すう……すう……」

その夜。3204号室は敏豪が一人で寝ていた。一樹は……別室で騒いでる最中。なお、酒を飲んでいるというわけではないので安心を。

「……失礼しまーす……」

しかし、ドアが開いて、誰かが入ってくる。侵入者とは言えるが……

入ってきたのは……

「……桐生君は……本当にいないみたいですね……」

ルナだった。所謂夜這いだ。

「……敏豪さん……」

眠っている敏豪の顔を覗き込むルナ。顔は何処となく赤い。

(・・・私、さらにもう一步先に進める・・・！進むんだ・・・！)

と、ベッドの布団をこっそりめくった時だった。

「・・・っ！」

既に先客がいた。ルナにとっては驚きだった。「自分が一番最初に出たのに、なぜ先客が！？」という。

で、その先客というのが・・・

「咲夜華・・・ちゃん・・・」

咲夜華だった。敏豪に抱きついて眠っている。背中に。だが、見ると肩が見えるが、ただの着崩れに見える。

「・・・うっ・・・(やっぱりお邪魔する前にトイレ行ったのがま
ずかったのかな・・・?)」

過去のことを悔やんでも遅い。そう踏ん切りをつけたルナ。そうして、行動を始めた。彼女がとったのはただ布団に入るだけでなく・・・

「お、お邪魔します・・・」

全裸になって、布団に潜り込む、ということだった。

「・・・敏豪さん・・・あったかいです・・・ん・・・」

ルナは敏豪の唇に自らの唇を落として、敏豪に抱きついたまま眠りについた。なお、全裸。

ルナが来る数十分前。

「・・・はっ!?!」

敏豪は突然目を覚ました。何かがあったわけでもない。偶然目を覚ましたのだ。

「ひゃっ!?!」

そして、同時に聞こえる女子の声。

「び、びっくりした・・・」

「……さ、咲夜華！？お前、どうして!？」
「……来ちゃった」

「てへ」と可愛らしく舌をちろつと出す咲夜華。傍から見れば嬉しいシチュエーションなのだが……

「……来られても困るんだけど……俺寝たいんだけど……」
「……一緒にいちゃ……ダメ？」

寝惚けでぼやっとしか見えない咲夜華の姿。しかし、その姿が次第に鮮明になってくると……

服こそはちゃんと来ていたが、それでもボディラインがはっきり見える服だった。

「……お前なあ、自分の部屋で寝てくれよ……」
「や!」

「や、じゃねえよ！本来男二人の部屋に女子がいてみる、何言われるか分かんねえよ!!」

「大丈夫だもん！敏豪君と私、夫婦って扱い受けてるから!」

「扱いがどうかという問題じゃねえ！親衛隊だよ！今日ばかりは来なかったけど明日はどう動くか分かんねえから!」

「私が黙らせるから大丈夫だもん!」

言い合い。しかしいい加減寝たくなった敏豪は・・・

「俺もう寝るから！自分の部屋戻って寝ろよ！」

布団をかぶって寝ころんだ。数分後には寝息をたて始めた。

「・・・お邪魔しまーす」

それを見て咲夜華は敏豪の後ろ側に入り込み、抱きついた。体を密着させることを忘れずに・・・

「・・・あれ、俺いつの間に仰向けで寝てた・・・？」

朝起きたら、仰向けになっていた。あの時咲夜華が入ってきて無理矢理話を切って寝た時は確実に横向いていた記憶があるのに。

「とりあえず・・・起きるか」

起きあがろうと手を横に立てた時だった。

もにゅっ。

「んっ・・・」

何か柔らかいものを掴んだ、と思ったら声が出た。女子の声。途端に俺の体に鳥肌が立った。・・・いる。絶対いる。咲夜華の声じゃ

ない。＝ルナ。ナタリアの声じゃなかったから。

・・・待て、じゃあこの柔らかいものは・・・もしや・・・

「んう・・・敏豪さん・・・」

「ん・・・」

辟易していた時にルナの寝言が聞こえ、もう一つ別の声があった。・・・
もしかしなくても咲夜華だった。

「敏豪君・・・おはよ・・・」

「おはよじゃねえよ！！昨日部屋帰って寝ろっつったろ！！」

「・・・だって・・・そんなことしたら敏豪君の部屋に来た意味無いもん・・・」

「なくたっていいんだよ！！俺のことを考えてくれ！！」

俺の言い分を聞いて、咲夜華は俺をまじまじと見て・・・

「敏豪君・・・」

「な、なんだよ・・・」

「・・・好きにして、いいんだよ・・・？」

・・・明らかに誘ってる台詞を言いよった。・・・だが俺は敢えて無視してルナの方の解決を図ろうとする。

・・・だが。

「・・・んゝ・・・もっと・・・わたしを・・・いじくりまわして
ください・・・」

「ここにも爆弾発言が!？」

寝言で爆弾発言しやがった!?!つかよく見たら・・・

「全裸あつ!?!？」

「ルナちゃん・・・大胆・・・!」

つーことはなんだ!?!俺生で触ったつーことか!?!?

「うおおっ・・・寒気が・・・」

一方、3215号室。

「んみゆ・・・」

今現在、部屋に一人残っているナタリアが目を覚ました。

「・・・んゝ・・・ダーリンの部屋に夜這いしに行こうと思っ
たのに・・・寝ちゃったのです・・・みゆう・・・」

目をこすって意識を覚醒させ、隣を見たら・・・

「誰もいない・・・何で誰もいなのです！？はっ、もしかしたら夜
這いに行ったのです!?!?」

隣にあったのは使われた形跡が殆どないほどに綺麗に整えられたベッド。

「ずるいのです、卑怯なのです、私だってダーリンと一夜をベッドの上で過ごしたかったですー!!」

ドアを蹴り開けるような勢いで部屋を飛び出し、3204号室へ駆けだしたナタリアだった。

「ルナちゃん、離れて!!風邪ひいちゃうとかそういうのとか関係なく!というか服着て!」

「にゆう・・・やあ・・・としひでさん・・・あつたかあい・・・」

俺は相変わらずルナと咲夜華に抱きつかれている。咲夜華は問題ない。ちゃんと服着ているから。問題はルナだ。いつ入ってきたか分からないというのもあるが・・・今いる状況が・・・全裸。それで寝ぼけた上に体を全力で押しつけているもんだから・・・当たってるわけで・・・

「・・・ルナ、離れてくれ・・・!その、あれだ、胸が、当たって・・・」

「ふにゆう・・・やですう・・・」

完全に寝惚けている。咲夜華が必死に引き剥がそうとしているけど、まるで「梃子でも動きません」とでも言わんばかりに抱きついている・・・。おかげで抱きつく力も強くなった!!胸もしっかり当たってしまふというわけで・・・

「さ、咲夜華・・・いったん離してくれ・・・。胸が・・・ルナの胸が・・・」

「ダーリン!何もされ・・・」

物凄い形相でナタリアがドアを開け、入ってきた瞬間に言葉を失った。

「あ……あ……あ……」

……ああ、ナタリアがものすつごい涙目になってる……

「だ　　り

ん!!」

「おぶあっ!?!」

勢いよく突進してきた!?!おかげできれいに鳩尾に当たった!やばい、気持ち悪くなって……きた……

「ダーリン、なんで私の所に夜這いしに来てくれなかったのです!?!なんでこの二人の夜這いをおっさりと認めちゃってるのです!?!なんで編入生が全裸なのです!?!」

「昨日は疲れて寝ちまつたんだよ!で二人とも気が付いたらいた!ルナなんて全く知らないうちにいた!全裸なのは知らん!」

「私だけ何にもしてないのです……ずるいのです……卑怯……なのです……!」

目に涙が溜まってきた。……やばい、いつ決壊するかわからん。

「私だつて全裸になつてやるのですーっ!!」
「ならんでいいから!!脱ぐな、頼むから!!」
「脱ぐのですーっ!!」

俺の制止も意味無くナタリアは脱いでしまふ。勢いよく服が脱がれ、同時に下着・・・まあブラジャー?も脱がれてしまふから、胸が・・・ほら、弾んで揺れて・・・

「・・・ぶはっ・・・」

「きゃああっ!?!と、敏豪君!?大丈夫!?!」

「ダーリン・・・鼻血噴いちゃったのです」

「あ、血がもつたないや・・・」

まだ気を失つてないが・・・咲夜華が俺の鼻に口を当てて・・・鼻血を吸い始めた・・・

「・・・ダーリン、今日はずっと一緒なのです」

「わぷっ!?!り、リーあふおうふえふあん、ふあひふいふあふあえ

!(訳:リーアフォルテさん、抱きついちゃダメ!)

・・・やばい、咲夜華がどうにか流血沙汰にならないような対抗策を練ってくれているみたいだが・・・抱きつかれたままだから鼻血が止まらん。何れ失血死するぞ、俺・・・

「ふにゆ・・・?」

・・・声的にルナ起床。まずいぞ・・・マジでまずいぞ・・・!

「ちょ、敏豪さんに何してるんですか!?!」

「元は編入生が悪いのです!裸で抱きついてるなんて魔王が認めても私が認めないのです!!!」

「だ、ダメです!というか、認めさせてみせますよ絶対に!!!」

「ぷふあっ!!だ、ダメ、二人とも離れて!!!敏豪君が死んじゃうから!!」

俺はもう、鼻血が噴水のように出てた……。やばい、二度寝になりそうだ……。つかなる……

結果、俺は朝食に咲夜華・ナタリア・ルナと一緒に遅れ、先生に大目玉食らったのは別の話。・・・つか悪いの俺じゃないのに・・・

そのじゅうななっ！ 臨海研修旅行！ その4 夜這い、翌朝大絶叫のナタリア

ルナがとてつもなく大胆な行動をしてくれました。そして咲夜華も半分夜這いの行動をしてくれ・・・

ナタリアは朝大慌てて敏豪の部屋に着てそして女三人大乱闘。敏豪は鳥肌立ちっぱでした。

今回は2日目の様子。とはいえちよびつとです。というか死刑宣告。

そのじゅうはちっ！ 臨海研修旅行！ その5 下された死刑宣告、与えられぬ
研修旅行編その5です。

死刑宣告とは一体何のことか？それは・・・本編で！！

そのじゅっはちっ！ 臨海研修旅行！ その5 下された死刑宣告、与えられぬ

「全く・・・俺一切関係ないのに説教食らうって初めてだよ畜生・・・」

ご立腹な敏豪。それを見てシユンとする咲夜華とルナ。ナタリアもちよつと申し訳なさげにしている。

「まあまあ敏豪よお、彼女たちに悪気があったわけじゃねーんだし、許してやったらどうだ？」

「悪気があつても無くても、とぼっちり受けたことに対する怒りをどうにかしてーんだよ！」

一樹にもあたる。悪気はないのにやってるから性質が悪い、というのも大きいが、誰かに絞らない敏豪も悪いんじゃないか、と一樹は思った。

「ま、今日一日は一人で自由に過ごしてきたら？どうせ今日は屋外自由行動だし。」

「元々そうするつもりだったよ」

外出する準備を始める敏豪。今日は海は禁止だが街へ出て色々を見て回れ、ということなのだ。各自自由行動で。

「ダーリン・・・」

そんな中、ナタリアが声をかける。

「・・・なんだよ」

「・・・二人に自由にさせたのがやっぱり許せないのです。今日は・・・寝かせないのです」

「・・・やめてくれ」

耳打ちレベルでぼそつと言うナタリア。それに敏豪は身震いさせてすぐに拒否した。明らかな死刑宣告だったためである。

「敏豪君？」

「どうしました？」

「・・・明らかな死刑宣告を受けた気がする・・・」

「死刑宣告？」

「ダーリン、言ったら本当に徹夜するのです」

またさらに死刑宣告。大凡何をするつもりか分かってしまった敏豪は、絶対に今日は鍵をかけて寝ようと堅く誓ったのだった。

「さて、とりあえずロビー行って説明受けっぞ」

「・・・めんどくせえ」

敏豪はめんどくさそうに一樹についていく。三人もそれに続いて部屋を出た。荷物はまとめてあったのだ。

「なんでこうなった・・・」
「よ、よろしくお願いします・・・」

ロビーで受けた話。二人一組、というのが前提条件だった。あくまで迷子になったり逸れたりしないように、そして連絡が取りやすいように、という配慮だった。それで揉めに揉めたのがやっぱりあの三人。誰が俺と一緒に行くか、で揉めていたのだ。

で、それをどうにか止めようと動いたのが、我らがやる気無し先生だった。「面倒だからじゃんけんできっと決めてー」の一言で解決しちまった。

そこで、勝ったルナが俺の相手になったわけだ。咲夜華とナタリアは・・・まあ、残ったのがあの二人だったし仕方ないっちゃ仕方ないんだけど・・・とんでもないことになるな、絶対・・・

「敏豪、ヴェイルフォールのこと、ちゃんとエスコートしてやれよ？」

「エスコートも何も、初めて来た場所でんなことできっかよ」

「ま、それもそうだな」

「このやる、他人事みたいに！」

「他人事だよ、最初っから！ははっ！」

「こなくそっ！」

「あただだっ！！ちょ、こめかみ骨で挟むのやめっ！」

後に残ったのは、一樹の醜い悲鳴だった・・・

「・・・さて、どこ行こうかな」と

「私は・・・敏豪さんが行きたいところならどこだってついていきます」

ルナは完全俺任せだった。・・・つってもそれほどっか行きたいところあるわけじゃないし・・・

「……適当に土産物屋でも回るか」
「そうしましょうか」

言うなりルナは俺の腕に自分の両腕を絡めてきた。……待つてくれ、それをされたら俺は滅茶困る。

「ルナ、離れてくれ……」
「嫌です」

離してくれ、と言っても離れたがらなかった。鳥肌立つし、はつきり言っで甘い臭いがするから……ちよつと酔う。辛い。

「これで……二人に差をつけます、絶対に……！」
「……ルナ……俺のことも考えてくれよ……？」
「ヤですもん、今日の夜、あんなに迫つたのに何もしてくれなかつたんですもん」

……あれか、あの朝のあれか。あの全裸事件か。つまるところ俺が半分死にかけたあれか。主にナタリアの胸で。死因？窒息死だよ畜生。

「だから……今日も行きますから……！」
「来なくていいから……！」

今日はあれだ、部屋の鍵をしっかりとかけおかないといけないっばい。どうせ一樹は出かけるだろうからその隙にかけてしまえばOKだな。

・・・美少女三人に好かれてる俺ってリア充なんだろうなと思うけど・・・ここまで来ると正直・・・嫌だ。

おまけ

「榊敏豪えっ!!!!覚悟しろ、今日こそ息の根を止めてくれるあっ!!」

「うっさいわー!!」

先頭を走ってきた野郎を背負い投げ、後続の奴らにヒットさせる。
そしてその後ろの奴らはしっかりと躓いて転んでいやがった。ザマ
三口。

「敏豪さんに手を出すなんて・・・もうっ!!」

なんかルナがご立腹。理由?どうせ俺が好きで、その俺を攻撃する
からじゃないの?それしか理由が考えられない。つか、それ以外の
理由が見当たらない。自惚れじゃなくて、マジで。俺じゃなくて一
樹だったら・・・どうなっただろ?怒ってもここままでじゃない気がする。

そのじゅっはちっ！ 臨海研修旅行！ その5 下された死刑宣告、与えられぬ

死刑宣告。それは敏豪にとって様々な意味で大変なことになることは間違いありません。

次回は・・・まあ・・・何も言っまい、ということ・・・。分かる人には展開が分かります・・・

そして、前募集したゼバルの女の子。いつ登場するかを発表します。

彼女の初登場は・・・

この修学旅行編最終話に、です。

そのじゅっきょくっ！ 臨海研修旅行！ その6 死刑執行の夜（前書き）

やってやりました。だが後悔はしていないっ！

・・・書いてて「わーなんとという能力の無駄遣い」と思いました。
そんな19話、どうぞ。

そのじゅっきゅっ！ 臨海研修旅行！ その6 死刑執行の夜

「じゃあな敏豪。明日の朝また会おうぜ」

「今日は部屋戻ってくんなよ？ぜってー開けねえから」

「へいへい」

一樹を軽くあしらって（つか部屋からさっさと追い出して）俺は今日の夜、どう生き延びるかを考える。

「・・・まずは鍵をかけて・・・ロックは厳重にと・・・」

オートロックで鍵を厳重にかけた。外からは絶対に入ってこれない・・・はず。少なくとも、従業員以外は。絶対に。

「後は・・・何をすべきだ・・・？」

窓も鍵をかけた。二重ロックで。・・・後はもう・・・寝るだけだ・・・

「さて・・・寝るか・・・」

『寝させないって言ったのです』

「っ！？」

突然聞こえたナタリアの声。・・・待て、鍵は全部かけたから入れるところはないはず・・・！

『なんで声が聞こえるのか気になるのです？』

今もなお聞こえるナタリアの声。・・・一体何処から！？俺は今窓際にいる。ベッドを見るが、誰もいない。

『・・・ここなのです』

もぞもぞと出て来たのは・・・ベッドの下！？ちょ、ええっ！？

「編入生には感謝してるのです。私をドアの影まで連れてきてくれたのですから」

影・・・もしかして・・・夢魔の力・・・！？

「分かったみたいなのです。私は討魔の力を持っていても一端の夢魔、影に潜って相手に近づく力くらいは持つてるのです」

「・・・一体どうやってベッドの下まで・・・！？」

「簡単な話なのです。編入生がトイレでドアの前を通るのを編入生の影で待って、影が重なったらすぐドアの影に移って、ダーリンが

近づいたその一瞬でダーリンの影に入り込んだのです。そしてベッドに座り込んだ時にベッドの下に潜り込んで実体化した、ただそれだけなのです」

・・・全くもって能力の無駄使いだな・・・

「さてと・・・今は11時30分・・・始めちゃうにはちょうどいい時間なのです」

「始めるって・・・丁度いいって・・・何のことだよ・・・」

何となく嫌な予感がする・・・当たって欲しくない嫌な予感が・・・

「何って・・・ダーリン・・・女の子の口からそれを言わせるなんて・・・酷いのです・・・。・・・でも、そういう所も好きなのです・・・」

「・・・お前なあ・・・」

頬を赤く染めて手で覆うナタリア。・・・こいつ変態か？

「ということだーリン・・・」

「ちょ、待て、ナタリア！！俺はまだそういうことはしたくない！！」

「待ったなしなのです」

目の前で何の憚れも無く臆することも無く・・・堂々と服を脱ぎだしたナタリア・・・マズい・・・これはマズい・・・

「・・・逃げ「られるとも思ってるのですか?」・・・だよな畜生・・・っ!」

半裸（つか下着だけ）の状態でジト目され、諦めるしかないのか、と思った時だった。

・・・そうだ、一瞬で外に逃げれば・・・!

「逃がさないのです、ダーリン!」

「うわっ!」

そして立ち上がったその瞬間だった。何か縄のようなもので縛られて動けない・・・!!

「ナタリア・・・っ!何を・・・」

「影をロープみたいにして縛っただけなのです。ダーリン、逃がさないって言ったばかりなのです」

「ふざ・・・けんな・・・っ!」

無理に見えないロープを引きちぎろうとしたが、全然引き千切れる

心配がない。・・・何だよ、この、ロープは・・・っ！

「私の影のロープは私が外れるって思うかほかの術か何かで解除しない限りきれないので。・・・さあ、ダーリン・・・」

やばい・・・どんどんナタリアが迫ってくる・・・！！これマジでやばいって・・・！！

『あの・・・敏豪さん・・・？』

そんな時、救世主と言えそうな声が聞こえてきた。ルナ・・・！いいタイミングで来てくれた・・・！

「ル @\$・・・っ！！」

「・・・喋らせないので・・・」

ルナに助けを頼もうとしたら口を塞がれ声を出せなくなった。見えないからこれもナタリアが作りだした影・・・！！

「~~~~っ！！~~~~っ！！」

「声を出させないので。誰にも邪魔はさせないので・・・」

じたばたするが、出る音はベッドが軋む音。どうしようもない。「
れで気付いてくれたらいいのに……っ!!」

『ドアも開かない……もう寝ちゃったんですか……はぁ……』

……最悪だ、異変に気付いてない……!帰った……!!

「……邪魔者はいなくなっただのです。ダーリン、明日の朝までず
っとイチャイチャしようなのです」

「むーっ!!む

っ!!」

足をばたつかせて必死に抵抗するが……

結局俺は・・・大変なことを「させられて」しまった・・・。
二度と取り返しのつかないことを・・・。

朝6時20分。西条東高校の生徒が止まるこのホテルは6時になるとオートロックが自動で解除されるシステムとなっている。もしかしたら、のことを考慮してのシステムだ。

そして、それが敏豪にとって最悪な事態を招くことになってしまった・・・

『(コンコン) 敏豪君？入るよ？』

『あ、あの、入りますよ？』

控えめにドアをノックする咲夜華とルナ。そしてその部屋の主はと
いうと・・・

「・・・んあ・・・？咲夜華と・・・ルナの声・・・？・・・つて
やべえ・・・！これ見られたらやべえつて・・・！！俺、今日死ぬ
つて・・・！！」

「・・・だーりん・・・」

敏豪は今の現状を思い出してしまったのだ。昨日の夜からナタリア
が眠ってしまうまでの間、大変なことをしてしまったのだから・・・

「ちよ、ちよつと待ってくれ！まだ着替えてないから！！」

『でも下着くらいは大丈夫だよ？気にしないよ私』

『わ、私も気にしませんよ・・・？』

「俺が気にするっての!!」

敏豪は二人に入ってこさせないように必死に制止を駆ける。しかし・

「ふにゆう・・・だーりん・・・だいしゅきれしゅ・・・」

この一言が、大変なことになったのだ・・・

『敏豪君・・・今リーアフォルテさんの声が聞こえたけど・・・どういうこと・・・?』

「い、いや・・・それは・・・その・・・」

『・・・エッチなこと・・・してないですよね・・・?』

『入るからね、敏豪君!!』

「ちよ、ストップ!! ホントにダメだつてば!!」

敏豪は頑張って動くとする。・・・しかし、ナタリアが上に乗っかっていて、しかもまだ縛られている(影のロープ。ついでに言うに乗っかって抱きついている状態なので尚更)ため、動くに動けない。

そして、運命のドアが開いた・・・

「敏豪君! 何・・・を・・・」

「・・・そ・・・そんな・・・」

入ってきた二人が見たもの、それは・・・

既に『事後』な状態の二人だった（敏豪は被害者だ。抵抗した後もきつちり残っている。つまり犯人はナタリアというのは一目瞭然）。

「・・・あふう・・・」

「る、ルナちゃん！？だ、大丈夫！？」

それを見たルナは卒倒してしまう。

「・・・ねえ敏豪君・・・これ・・・どうということなの・・・？」

「いや、これは・・・俺からやったんじゃないってのは分かってくれるよな！？現に動けないわけだし！！」

「・・・それでも・・・抵抗した風には見えないんだけど・・・」

「抵抗したくてもできなかったんだって！！いつペンルナ来た時に助け求めただけでナタリアに口塞がれて声出せなかったんだよ！！」

「それでも・・・それでも・・・！」

「しかも不可抗力！俺は一度鍵もかけた！どうしようもなかったんだよ！！」

「・・・敏豪君・・・？」

「は、はいっ！！」

「・・・お昼・・・覚悟しておいてね・・・」

「・・・りよ、了解・・・」

妙に凄味を聞かせた声で言う咲夜華に、敏豪は有無を言わさぬ返事を
するしかなかったのだった・・・

「えっ！？ナタりんやっちゃったの！？」

「やっちゃったのです・・・あう・・・まだ歩きづらいのです・・・」

「で、で、どうだったの！？やっぱり・・・」

ナタリアが思い切り周りに自慢しちゃっているため、敏豪は羞恥に耐えるしかない。というか寧ろ公開処刑な気分。

「・・・」

「・・・」

「・・・（視線が・・・痛すぎる・・・）」

そして、横から来る「敏豪君のバカ」「私だつて」「リーアフォルテさんになんか負けないんだもん」などなどの視線。言うまでも無く、咲夜華とルナから来るものだ。

（・・・いつそ俺を殺してくれ・・・！）

敏豪はそう虚空に願うしかなかった。

そのじゅっきゅっ！ 臨海研修旅行！ その6 死刑執行の夜（後書き）

やっちゃった、だが後悔はしていない！断言しておきます。

次回は前アンケートを取って出た結果の子が（最後にちょっとだけ）
出ます。恋愛戦争により一層の嵐が・・・

そのにじゅうっ！ 臨海研修学校！ その7 帰りのバスでの珍喜劇、そして帰

臨海学校編終了です。まあ・・・長いと言えば長くて、短いと言え
ば短い、そんな臨海学校でした。・・・敏豪の心に大きな傷を残し
たまま・・・

あと、前アンケートを取って、見事決定したゼバル娘が出ます。

そのにじゅっ！ 臨海研修学校！ その7 帰りのバスでの珍喜劇、そして帰

三日目。今日はちよこつと土産物屋を見て帰るだけ。なんか修学旅行と殆ど変りなかった気もする研修旅行も終わる。そして、俺にとつて、（嫌な意味で）二度と忘れられない旅行が。

「ダーリン・・・ふふっ・・・」

そして、そのきっかけを作ってくれやがった原因が俺の右腕に抱きついていた。

「ナタリア・・・離れてくれ、歩きづらい・・・」
「嫌なのです」

「・・・ちよつと、リーアフォルテさん！」

「何なのです、負け犬のちっぱい？」

「うぐっ・・・」

・・・またこいつは火に油を注ぐようなことを・・・

「い、いくら敏豪君と・・・その、え、エッチなことしたからって、ひ、ひつつき過ぎだと思っのー！」

「勝者ゆえの特権なのです」

「・・・っ！ー！」

「うおっ！ー？」

突然開いている左腕に引力を感じた。・・・見たらルナが引っ張っていた。っーか・・・痛い！

「何してるのです編入生！ダーリンは絶対に渡さないのでしょ！？」
「~~~~っ！！！」

なんか・・・もう俺の取り合いに発展してんですけど・・・！？

バスの中。なぜか4人個室式になっているという変わったバスの中。
そこでもまた・・・

「ちっばいも編入生もいい加減に現実を認めて諦めるのです!!」
「そのアドバンテージがいつまでも続くと思わないでよ!!」
「そうです! 私達と同じことをしたら同等なんですからね!?!」
「咲夜華! ナタリア! 俺の腕を引っ張るな!! ルナ! 頼むから腰を
引っ張らないでくれ! こ、腰が抜け、じゃなくて折れるって!! つ
か鳥肌! 鳥肌立ってるから!!」

敏豪の取り合いが繰り広げられていた。ちなみに彼らのいる個室は
前後と左側は同じ1-Bの生徒だったため、何の問題も無かった。
というか寧ろ・・・

『咲夜華もルナも諦め悪いよねー。ナタリアが食べちゃったつてのにさー』

『それだけ敏つちにぞっこんなんだよ、あの二人。そうじゃなきやあんなまで張り合ったりしないよ?』

『というかナタリアん大胆だったよねー。まさか研修旅行でやつちゃうなんてさー』

というガールズトークも・・・

『榊のヤロー、美少女3人に惚れられてリア充が移動まっしぐらじやねーかよ。後で思いつきりいじ・・・じゃなかった、祝福してやるうぜ?金曜の放課後は結婚式か?』

『お、いいんじゃない? そうだ、仲人は桐生に任せた方がいいんじゃない? 一番のダチはあいつなんだからよ』

などという男子の話も盛り上がっていた。

「・・・むー・・・」

一向に折れる気のない咲夜華・ルナにむうと唸るナタリア。咲夜華は敏豪を一度見て・・・

「・・・敏豪君、忘れて・・・ないよね・・・?」

「・・・忘れてって・・・あの朝のあれか!?! 一体何する気だよお

い!？」

虚ろな目で見つめてくる咲夜華に、敏豪は戦々恐々とする。

「何って……決まってるよ!」

「一体何を……うつ!？」

敏豪の首筋に噛みついた咲夜華。いつものようなかぶり、などという可愛らしい音はたつてない。寧ろガブリといった感じだ。

「ちょ、ちつぱい!？何してやがるのです!？」

「おひおふい!」

「ちょ、ま、い、勢い良く吸ったらああああああ……」

今迄のようにチューチュー吸うのではない。ズゾゾ、という音が聞こえるほど勢い良く吸っているのだ。

「あ……や……ば……」

勢いがあるため、一気に敏豪の意識は失われた。時間にして、僅か3分。

「ちっばいー!!何してくれやがるのです!?ダーリンが・・・ダーリンが!!」

「ぷはっ・・・致死量までは吸ってないもん!」

「わわっ・・・敏豪さん、しっかりしてください!!」

離れたことでもたれかかってきた敏豪を支えようとするルナ。ただ・・・

「と、敏豪さん、しっか・・・きゃあっ!!」

上手く支えることが出来ず、もつれこんで倒れてしまう。結局・・・

「と、敏豪さ・・・ひゃうっ!!」

敏豪がルナの胸に顔面ダイブする形になってしまっていたのだ。

「・・・ルナちゃん!卑怯だよ、それ!!」

「色仕掛けは私の専売特許なのです!!」

「今色仕掛けて言った!!」

「あっ・・・」

咲夜華とナタリアが言い合っているその間、ルナは必死に起きあがるうとしたが・・・

「んっっ！…ふうっっ！…！と、敏豪さあ…んっ！…お、起きてくだ
さっ！っ！…！」

ただもがくだけしかできないでいた。

「……まったく、酷い目にあつたぜ畜生……」

俺は一人帰路についていた。咲夜華とナタリアは気がついた後、何故かご立腹で、ルナはどこか嬉しそうな顔をしていたのが分からなかったよ畜生。

「……今日だけで一体どれだけ血を吸われた？……あー畜生、まだふらつくって……」

足元がふらつく……というか途中でなんか柔らかいものに顔を突っ込んだ感じがするけど……何だったんだ？

「ただいま……おろ？靴？」

帰ってきたら、玄関に靴があつた。……なんか女物？

『お帰りー。アンタに客よー？』
「客う？」

・ そんなんいるわけねえのに・・・もしかして・・・あの女物の靴・・・

「・・・部屋に行くか」

俺はリビングに行くのを止め、自分の部屋に行った。

「・・・やーつと帰ってこー」敏豪!!」・・・マジで？」

部屋に入った時、やけに聞き覚えがある・・・ような声でした。前を見たら・・・赤い髪の子がいた。赤じゃないな、深紅だな。そしてその髪で俺を知っていると云ったら、一人しかいない・・・

「ひ、久しぶりだな・・・音羽おとば・・・」

「ほんつとに久しぶり！元気だった？」

「あ、ああ・・・まあ・・・な・・・」

・
・・・久しぶりに会ったとはいえ・・・音羽は女・・・やっぱり・・・

「敏豪？どうしたの？」

「いや、その・・・なんというか・・・」
「言って」

「は？」

「洗い浚い言えって言ってるの！！言わないと酷い目遭わすわよ！」
「？」

「・・・お前の酷い目って昔っから頭に噛みつくことだったろ・・・」
「

・・・なんとなく分かってる。昔、こいつがキレると絶対に頭に噛みついていたんだよな・・・

「・・・何？噛みついて欲しいの？だったら・・・遠慮なくやらせてもらっわよっ！！」

「ぎゃあああああっ！！！」

噛みついた。思い切り。痛い！頭蓋骨が碎ける・・・なんてことはないが痛い！！

「痛い！痛いつて！離せ音羽！」

「らっはらいいらはいお！！」

「言っから！！言っから！！」

俺が言っつといたら離れた。・・・めっちゃ痛え！！

「で？どうなのよ、敏豪」

「なんつーか・・・その・・・あーもう、お前、言ったことで何も事起こすなよ!？」

「しないわよ。恋人が出来たとか、（閲覧禁止）した、とかじゃなかったら」

・・・言えなくなった。・・・音羽の正体を知っている以上、迂闊には言えない・・・

「まあ、なんつーか・・・俺、女子に好かれた・・・」

「・・・よし、今度縊るわ」

「やめる」

あっさり言いやがった。やっぱり予想通りというべきだな。

「お前なあ・・・」

「もしくは・・・不妊症か不感症にでもしてやるつかしら？それとも・・・くふふ・・・」

「だから止める」

「あだっ!？」

あまりにも怖い事を言い出したから、頭に思い切り拳骨を食らわせてやった。

「いったいじゃないのよ！」

「アホ、物騒なこと言うなっつーの。後始末すんのいっつも俺だったんだからよ、それくらい考えろ」

「うー……」

懐かしいジト目。……やっぱり音羽だね。変わってねえ。

「……あ、そだ敏豪」

「なんだよ」

「あたし、明日から敏豪と同じガッコ通うからよろしくね！」

「はあっ!?!」

こいつ、肝心なことを後々思い出したように言いやがって……!

「あ、それと……」

「今度はなんっ!?!」

頭を上げた瞬間、音羽にキスされた!

「ふう……。どう?久しぶりのあたしの唇は?」

「ちよ、おま、何を……」

「宣戦布告よ!敏豪はあたしの物なのよ?誰にも取られてたまるもんですかっ!?!」

「……宣戦布告って……」

「じゃあね敏豪！明日迎えにくるからね！！」

固まった俺を置いて、音羽は行ってしまった。

『おばさん、また明日来るからねー！！』

『はいはい、待ってるわよー？なんなら、朝御飯もどろっ。』

『家で食べてくるからいい！！じゃあねー！！』

・・・嵐のような幼馴染、音羽は帰っていった・・・

「・・・たく、なんなんだよ・・・」

俺はそう呟くしかなかった・・・

「・・・あれ？そういえば音羽にキスされた時・・・鳥肌立ってな
かったような・・・？」

そのにじゅっ！ 臨海研修学校！ その7 帰りのバスでの珍喜劇、そして帰

ついに生まれたゼバルっ娘。他の三人とはまた違う感じを目指してみたのですが・・・如何でしょうかね？

次回は彼女が一騒動を起こす前編です。・・・それ以外にもナタリアが色々してくれますが。

そのにじゅうちっ！ 音羽パニック(前編) (前書き)

音羽が敏豪にとって面倒を起こしてくれます。どんな面倒かは・・・
本編で。

ついでにナタリアも面倒を起こしてくれます。

そのにじゅうちっ！ 音羽パニック（前編）

「あー、転校生が来たから紹介するわ。つーかとつとと席座れー」

朝。我らの担任はこんなことを言ってくれやがった。俺と一樹は知っている。・・・あいつだということ。・・・

「敏豪、お前、今日こそ危なくねーか？」

「・・・一樹、俺が死んだら俺の灰は川にでも流してくれ・・・」
「・・・安心しろ、死ぬのは一緒だ、どうせ・・・」

既に葬式ムードが出来あがっている俺達。仕方がないさ。転校してくるのがアイツだから・・・。

で、全員が席に着いた頃。

「んじゃー入ってこい」

担任の一言で教室のドアが開き入ってくる。・・・来た。深紅とい
うのが相応しいくらい赤く長い髪の女子が。

「テキトーに自己紹介頼まー」

「えっと、姫川音羽です。よろしくお願ひします！以上！！」

適当に自己紹介しやがった。・・・ま、予想通りっちゃ予想通りな
んだけど。

「姫川は・・・丁度榊の後ろが空いてるからそこ座れー」
「はい」

さらっと言いよったこの幼馴染み、俺の後ろに行った。・・・ああ
めんどくせえ・・・

「よろしくね、敏豪」
『っ!』

そして後ろから囁く音羽。当然横に入る咲夜華・ナタリアは過剰反
応するわけで・・・

「・・・(おろおろ)」

そして斜め後ろのルナはおろおろするしかなかった・・・らしい。

「ダーリン!!これは一体どういうことなのです!?!正確に、正直に説明してほしいのです!!!」

「どうもごうもないわよ!。さっさと現実を認めなさいよ」

「あ、あの、二人とも、け、ケンカは・・・その・・・だ、ダメですよ・・・?」

「敏豪君!!」

「だからお前ら人の話を聞け!」

SHRが終わってすぐの休み時間。案の定詰問される俺。当然、音羽のこと。・・・ルナ、お前の立ち位置は本当に申し訳ないって思ってる・・・

「あたしは敏豪の幼なじみで初恋の相手なのよ?会ったばっかのあんたらじゃ話になんないわよ」

「う、うーっ!!」

「で、でも、その、き、キスすら済ませてないような気も・・・」

「あら残念。あたしはもうとっくにキスしたわよ。小学校のころに」

「き、キス済み!?!」

「あ・・・あう・・・あう・・・」

愕然とする咲夜華に呆然とするルナ。自分が俺のファーストキスを奪ったと思っていたらしい。・・・ゴメン、ルナ・・・

「やっぱり結局は私の独壇場だったのです牛」

「牛・・・!?!あ、あんただって牛じゃないの!!」

「お前に比べれば牛じゃないのです、それに私の方がお前より圧倒的優位性があるのです」

「な、なによ・・・」

や、止めるナタリア……！それを言ったら俺が……俺が死ぬ！

「私はダーリンと」それ以上言うなーっ！！」……ダーリン……
「？」

大声で制止をかけた。絶対これ以上言わせるわけにはいかない！何が何でも言わせるものか！言ったら……俺が死ぬから！！

「……敏豪……一体何があったか……説明してくれるかしら……？」

「……音羽？顔が怖いぞ？般若のような顔は……やめ……ぎやあああああっ！！！！」

噛みつかれたあああああっ！！

「敏豪のバカッ！変態！女たらし！！」

「ふざけんな！俺は完全に被害者なんだから！！」

「うっさい！！」

「……結局一樹が暴露しやがってこの様。……俺、何も悪くないよな？」

「……いーもん……」

「は？」

「あたしだってその内敏豪を（禁則事項）やるんだから！！」

「うおーい！！いきなり爆弾発言すんな！！」

「うつさい！あたしはやると言ったらやる女だつての忘れたの！？」

いや、忘れたわけじゃないけどよ！

「何か言うのに時と場を弁えろつて言いたいんだよ！！」

「気にしないの！というか何ならここで宣言してあげよっか？あんなの嫁はあたしだつて！」

「やめい！」

「あだっ！！！」

後半へ続く・・・

そのにじゅうちっ！ 音羽パニック（前編）（後書き）

次回は後編。その最後でルナからある提案が。それは何かは・・・
待て次回！

そのにじゅうにっ！ 音羽パニック（後編）（前書き）

遅くなりましたが、音羽パニック後編です。色々あります、敏豪と一樹の友情物語だったり、それで音羽が探しまわって怒ったり、ルナが提案したり・・・

それはまあ、本編で。

そのにじゅうたっ！ 音羽パニック（後編）

音羽が転校してきて、早速俺は恋愛戦争に巻き込まれた。・・・いや、音羽が一方的に力を見せつけただけ、と言っべき？

それは・・・一限目の体育から既に勃発した。

「アンタのへボ球、簡単にホームランにしてやるわよ！」
「打てるもんなら打ってみやがれなのです！」

なんか音羽がバッターになって、ピッチャーはナタリア。なんとなくネクストバッターはルナ。ワンアウトノーボールノーस्टライク。
(ちなみに男子は丁度俺のいるチームが攻撃で、俺は回るかどうかの瀬戸際な位置。だからこうやって傍観出来たりしている)

「せやあつ!!！」

そしてナタリアが投げた。いつもの剛速球を。

「・・・甘いわね、その球もらった!!！」

言うなり音羽はバットを振った。空振るなんてことはなく、キーン、という小気味いい金属音を鳴らして白球はナタリアの上を飛んでいた。

「そ……んな……!」

「残念だったわねー。それでも小中学校では運動神経抜群の美少女って言われてたのよー」

余裕ぶっこいて塁を踏み進んでいく音羽。愕然としているナタリアを尻目に、だ。

「はい一点 アンタのただの速球なんて、打ってくれなんて言うようなものよー」

「うぐぐ……!」

悠々と……というか歩いてベースを踏んで、厭味満々で言い放った音羽。……こりゃ最悪だ。

「うわー……姫川さんかっこいい……」

「ホームランって……凄いなあ……」

女子からはちゃんちゃんちゃの拍手喝采。

ついでにその直後のバッターのルナは・・・

「え、えーい！！きゃんっ！！」

「ルナっちー、バッタアウト」

「あう・・・」

盛大に空振ってスリーアウト。最後は尻もちをついたりもした。そして交代。ピッチャーは・・・音羽。

「まさか、あんたが相手とはね。どうする？勝負する気？」

「さっきの汚名挽回なのです」

「・・・リーアフォルテさん、それを言うなら名誉挽回、それか汚名返上ですよ？」

「・・・汚名返上なのです！！」

顔を真っ赤にして言いなおすナタリア。・・・あいつもムキになるもんだなあ・・・

「敏豪、お前の番だぞー」

「あ、マジで？」

「なんだよ、嫁さん見てたのか？」

「・・・いや、音羽のやつが暴走しねーか心配だったただけだよ」

「・・・ああ、納得」

俺を呼びに来た一樹までもが納得するほど、音羽は勝気だから・・・
勝気だから暴走しかねないんだよな・・・

「音羽に噛みつかれるお前ってさ」

「なんだよ」

「結構・・・懐かれてんだな」

「それで済めば御の字だっつの」

苦笑いで返す俺。本当にそれで済めば御の字なんだがな・・・

結局、ナタリアは三者凡退の頭を飾ったに過ぎなかった・・・

「このグラフの式は $x \parallel 3$ 、 $y \parallel 2$ 」
「正解だ」

授業。この授業は今までは咲夜華・ルナの二人が競り合う形になっていたが（とはいってもそんな感じには見えなかったが）、そこに音羽が入り込む形になった。・・・音羽、勉強できたんだ・・・

「・・・はぁ・・・俺、本当に凡人だよなぁ・・・」

「どうした神」

「いえ、独り言です」

思わず漏れた独り言に気付かれ、とりあえず取り繕う俺。・・・本当に凡人だっと思って思うな・・・勉強が出来るわけでもないし、スポーツだって万能なわけもない。・・・考えるだけでもバカらしくなってきた・・・

「・・・うにゆ・・・」

横ではナタリアが唸っていた。・・・なんか声が可愛いんですけど。

「・・・はあ・・・」

「どうしたよ、敏豪」

「・・・一樹か」

昼休み、屋上でぼけーっとしていた時に一樹が来た。

「なんか浮かねー顔してんな？」

「分かるか？」

「分かるつての。何年お前とダチやってる？」

「・・・だったな」

やっぱり、長年の友人には分かるものがあるらしい。

「で、どうしたんだ？」

「・・・なんかな？俺の周りが超人過ぎて、すっごい俺が凡人に思えてきたんだつての・・・」

「・・・なるほどな。確かに代永は勉強面天才、リーアフォルテは運動神経抜群、ヴェイルフォルは見た目起用そうだし、音羽はほら、器用貧乏つて言葉が似合うくらいなんでもできるだろ？・・・あ、出来ないことが一つだけあったか」

「なんだよ、その出来ないのつて」

「・・・しおらしくすることだな」

「・・・ぶっ」

思わず一樹の言ったことに嘖き出してしまった。・・・確かに音羽はしおらしくすることだけは・・・出来なかったな・・・

「まあお前が気にすることは無いって言うこつた。その天才たちを惚れさせたんだから、お前もそれなりに天才つてことだよ」

「・・・なんか釈然としねえ」

「言つなれば、恋愛の天才か？」

「・・・一度死ね」

・・・何でこんなこと言われんやならんのかという気持ちはあるが、
なんとなくすつきりはした・・・と思う。

「・・・ああ、それと敏豪」

「なんだよ、まだ言うことあんのか？」

「音羽の正体、覚えてんだろ？あの三人が何であれ、誰か一人に絞
るんならあいつの能力だけはどうか阻止れよ？」

「・・・分かつてるよ。アイツがゼバルってことも、あいつが俺の
事狂ってるみたいが好きだったのも」

「それと素直になれなくて、最終的には過激な手段に出ちまうって
ことも、だろ？」

「まあな。お前も俺も、あいつの幼馴染みだからさ、分かんないわ
けでもねーもんだよな」

お互いで唯一知りえる事実。・・・まあ、これで気が楽になった。

「ありがとよ一樹。気が楽になった」

「気にすんなって」

礼を言って教室に戻った。そして・・・

「どこ行ってたのよ敏豪！！探したじゃない！！」

「探したって・・・俺すぐにどっか出てったわけじゃねえぞ」

「もういなかっただわよ！！バカ！」

「死に行つたわけじゃねえんだし・・・そんな心配することでもねーだろ？」

教室入つたら入つたでいきなり音羽が抱きついてきやがった。・・・
何故か鳥肌立たない不思議。

「ちよつと牛！！ダーリンに抱きつかないで欲しいのです！！抱きつくのは真の嫁の私の特権なのです！！」

「なによ脳筋！あんたみたいな脳筋は敏豪には似合わないわよ！！」
「むかつ！！お前みたいに無駄にでかい乳は余計にダーリンを怖がらせるだけしかないのです！！」

「ちよ、二人とも！！敏豪君の首に腕決まつてるから！顔が青くなつてる！！」

「敏豪さーん！！しっかりしてくださいーい！！」

・・・この日、三途の川を渡りかけた。ウソとかそついうもんじやない。マジで渡りかけた。

あとで気がついた時、俺は保健室にいた。付き添いでいたのはルナ。

「あ、気がつかれました？」

「・・・何があった？」

「姫川さんとリーアフォルテさんが敏豪さんを取り合っちゃって、窒息して気を失ったんです」

「・・・その後どうなった？音羽のやつ暴走しなかったか？」

「・・・その・・・『不妊にしてやるうか!?!』とか『お前なんか何も出来ないうちにあの世に送ってやるのです!?!』とかケンカ始めちゃって・・・」

・・・案の定、な感じだった。

「それで、桐生君と代永さんが二人を羽交い絞めにして、私が敏豪さんをここまで連れてきたんです」

「・・・そっか、ありがとな、ルナ」

「そ、そんな、お礼を言われることなんて・・・」

顔を真っ赤にして頬を抑えるルナ。・・・畜生、なんか可愛い。

「あ、後、昨日帰ってから恐怖症を治す方法を調べてたんです」

「・・・だからか？目の下にクマあんのって」

「は、はい。昨日寝ちやうのが遅かったので・・・」

「・・・なんかルナには本当に悪い気がしてきた・・・」

「それで・・・なんて書いてあったりした？」

「やっぱり、治すには怖いものに接して慣れていくしかないみたいなんです。高い所が苦手ならゆっくり高い所に登って行って少しずつ慣れていく。水が嫌いなら少しずつ水に触れて慣れていく。それしか方法がないんです」

「・・・そっか」

仕方・・・ないよな・・・。恐怖症つてのは大概そんなもんだし。・・・なんで音羽だけ何ともないのかが不思議だけ。

「ま、まあ、エッチなことしてほしいとかそういうことではないので・・・というかりーアフォルテさんみたいなことすると余計悪化するって聞いたので・・・」

「・・・ルナ、黒歴史にしておきたかった事をほじくり出さないでくれ・・・」

「えっ、あっ、ご、ごめんなさい！」

自分の言ったことで俺が嫌な事を思い出しちゃったことを謝るルナ。

「と、とにかくです！異性恐怖症を治すには少しずつ異性の事を知ってあげばいい、ということになるかもなんです。それが異性と触れあっていくだけ・・・友達としてでもいいんですけど」

「・・・な、なるほど・・・」

「これを言ったの、敏豪さんだけです。・・・私だけとは言わないので、皆でゆっくり、治していきませんか？敏豪さんの女の子嫌い」

「・・・そうだな。一応きっかけもあるわけだし、治る可能性はあるわけだからな」

「きっかけ？」

「・・・げ」

このあとルナに『きっかけ』について（音羽の事を伏せて）説明し
なければならなかったという余談。

そのにじゅうにっ！ 音羽パニック（後編）（後書き）

次回から一気に時間飛んで夏休み編に入ります。一回目は

『夏休みの榊家 Part1』です。あ、Part1とありますが、その1その2とかの感じで、連続して、ということはありませんよ？

あと、この夏休み編は新キャラが何名か増えます。・・・ある悪魔なSNSやったら頭の中でキャラが増える増える。・・・妹キャラが・・・あーあ。

ちよい質問ですが、ヘル（死の世界の女神）とアナト（バアルの妹 or 嫁）は悪魔として認めてもいいのでしょうかね？

そのにじゅうさんっ！ 夏休みの榊家Part 1（前書き）

夏休み編です。第一回目はその中での榊家の様子です。

咲夜華とナタリア、登場しません。二人のファンの方（いるのかな？）、ごめんなさい。

そのにじゅうさんっ！ 夏休みの榊家Part 1

音羽が転校してきて、その後は・・・

俺が何度も音羽に噛みつかれたりナタリアに抱きつかれてその度に咲夜華が引き剥がそうとしたり、咲夜華に血を吸われてる所をルナに目撃されたり（この後ちゃんと弁明した。ルナも理解してくれた）

・・・しなかつたら普通に・・・気分良く夏休み突入！ってなつてただろうな・・・

「・・・で、だ」

「どうかしたの？敏豪」

・・・横には・・・音羽が。ちっさい頃ならそれでよかったんだけど。今は違う。・・・正直困っていたりする。

「なーにぼーっとしてんのよ。ほーら、ゲームやろって言ってるでしよ？」

「・・・面倒だったの・・・一人でやってる・・・」

「えー？そんなんじゃないが来た意味無いじゃん」

ぷう、と言わんばかりに頬を膨らませる音羽。・・・これでもうちよっと可愛げあったらなあ・・・

「ねーえーとーしーひーでー」
「・・・ったく・・・人の部屋に我が物顔で入ってきて本当の主に催促・・・お前本当にしつけのなっていない犬だぞマジで」
「敏豪にだっいたらしつけられたいな、あたし」
「冗談悪いこと言うなバカ」
「あたっ」

こつんと頭を小突く。

「むー・・・へへっ」
「・・・いきなり何笑いだしてんだよ、気色悪い」
「久しぶりに二人つきりだからさ、ちよーつと嬉しくて。にひっ」
「止める、そういうことを言うと俺に不幸が来る」
「不幸？」

音羽が聞き返した時、インターホンが鳴った。・・・ああ、誰か来た。一樹だといいんだけど。

「・・・よし、一樹だったら縊る」
「その前に俺がお前を縊っところか？」
「・・・敏豪にだったらいいかも・・・」

・・・溜息をつくしかなかった。何このマゾ娘。

『はい、どなたー？』

『あ、あの、お邪魔します・・・』

『敏豪ー、ルナちゃんよー』

下からする声。・・・よかった、面倒なナタリアとかじゃなくて・

・

「・・・ちっ・・・誰も来ないと思ってたのに・・・縊ろうかしら

・・・」

「・・・まったく・・・お前はもう・・・バカか・・・」

また一発小突いている間にルナが部屋にまで来た。

「お、お邪魔します・・・」

「あー、適当に座ってくれー。あいつはもう好き勝手やってくれてっけど」

「・・・あ、あはは・・・」

ルナが見た先には部屋の本棚から適当なマンガを取り出して読んでいる音羽。完全に好き勝手やっているのだから苦笑いしていた。

「あの、隣・・・失礼しますね」

「お、おう・・・」

隣にちょこんと座るルナ。・・・早速鳥肌が立った。

「・・・なによ敏豪、あんた鳥肌立ってんじゃない」
「うっ、うっせ！」

なんか見つかった・・・これ面倒なことになる・・・！

「へー、あんたが女の子苦手だったなんてねー・・・うりゃー！」
「うわっ！？」

急に音羽が抱きついてきやがった！！

「・・・あれ？」
「・・・変よね・・・」
『鳥肌の立ち方・・・変わってない・・・（ですね・・・）』

・・・なーんかいやーな予感が・・・

「ルナ、だっけ？アンタが敏豪の隣に来たら鳥肌立って、あたしが抱きついたら酷くならなかった・・・何が言いたいか分かる？」
「え、えと・・・その・・・」

「・・・あたしにかなりのアドバンテージがあるってことよ！！抱きついたってキスしたって、敏豪はあたしにだけ鳥肌が立たないんだから！！」

「あう・・・」

どや！と言わんばかりでルナを見下ろす音羽。・・・あーあ、これはもう、音羽はナタリアと同類の人間だ、って思いたくなった・・・

「・・・音羽・・・お前、ナタリアと全く同じような行動してんぞ・・・」

「ゲッ、あの脳筋と！？それ撤回しなさいよ！！」

「無理だ。今のお前の行動そのものが被った」

「えー・・・」

ものすっごい嫌そうな顔をしてぶー垂れる音羽。・・・しょうがないと思う、今のは本当にナタリアのそれだった。

「あらあらまあまあ・・・ごめんなさいね、ルナちゃんも音羽ちゃんも」

「いえ・・・これくらいはやらせて下さい」

「そうよ。何にも出来ないままお世話になるのってあだし絶対やだから」

キッチンにいるのはルナと音羽。母さんの戦場に立ってる理由は・・・
・料理するから以外にない。

「へー、ルナ、あんた結構手際いいじゃない。うわー、ジャガイモ剥くの上手いな・・・」

「そんなことないですよ……。お母さんもお父さんもいないから
自炊してて……。それで培ってきた拙い腕ですから」

きやつきやと盛り上がって料理が作られていく……。はず。

「うん……。料理できる女の子がいると楽でいいわ……。」

「母さん……。サボりたかったわけかよ……」

「あら悪いの？母さんだつてこうしたいときあるのよ？」

「へいへい」

なんかルナとか音羽が来てから、母さんは毎日こんな感じだ……。
もう、婚約者を決めちまつた存在のような扱い……。正直やだ。

326

「敏豪ー、おばさん、もうちょっとで出来るから待ってなさいよ」

「」

「へいへい、っと……」

「音羽ちゃんのお料理も久しぶりねえ。小学校の時以来だったかしらっ」

「」

「忘れたよ」

だべっているうちに料理が出来あがり、テーブルに並んでいく。

「……。凄いわねえ。ルナちゃんも音羽ちゃんも上手ねえ」

「そんな事無いですよ……。えへへ……」

・・・ルナ、なんとなく自慢してるぞ。

「へっへーん！どうよ敏豪！」

「また上達したみたいだけど・・・どうだか」

皆で食った昼は・・・二人の腕もあつてか美味かった・・・

そのにじゅっさんっ！ 夏休みの榊家Part 1（後書き）

次回は新キャラ出ます。・・・が、敏豪にはあまり関与しないキャラです。

そのキャラの恋心、それが叶うのかどうか……。・・・というか率は高いんですけどね、相手が『アイツ』なのだから・・・

次回と次々回は新キャラ祭りです。・・・計4人出ます。

そのにじゅっふんっ！　なんていった！？まさか『アイツ』に恋人が！？（前書

あいつとは……ちよくちよく出てくるモブ一号、と語っていいあ
いっです……ヤツです……

タイトルでも分かりますが……その『ヤツ』に……恋人
が出来ます……

そのにじゅうよんっ！　なんてこった！？まさか『アイツ』に恋人が！？

それは、ある日の電話から始まった。俺が知りうる全ての事情を見たとしても、あり得ないと思っていたこと・・・

「あ、敏豪君？ちよつといいかな？」

「咲夜華？どうしたんだよ、こんな遅くに？」（現在22時）

夜、突然俺の携帯に咲夜華から電話が掛かってきた。

「なんだよ？もうじき寝ようと思ってたのに」

「あー・・・ちよつと相談受けちゃってね？友達から」

「・・・なんだ、まさかの『請負人』？」

まさかの依頼が来た。・・・しっかし、いつもなら女子からの依頼は一樹から来るのに、なんで咲夜華から・・・？

「あれ？なんか変だった？」

「いや、依頼主女子だろ？」

「え！？なんでわかったの!？」

「今までの傾向。男子は俺に直で、女子は一樹経由だったから・・・おかしいとは思ってっけど」

「敏豪君の思う通り、女の子から・・・だけど、その子すっごい人見知りが激しくて恥ずかしがりだから・・・」

・・・なるほど・・・ね。

「で、話はなんか聞いてんのか？一体如何したいから頼んできたのか、って」

「私もそこまでは聞いてないんだ・・・」

「・・・とりあえず話だけ聞いてくれ。恋愛絡みなら手段を手当たり次第に考えねーとダメだろうし・・・」

「あ、うん、分かった。明日私の家にその子遊びに来るから聞いておくね」

「OK、じゃおやすみ・・・」

「おやすみー」

簡単に電話口で別れ、俺は早々に眠りに着いた。・・・恋愛絡みだったら・・・どう動くかで決まるからな・・・

後日。敏豪は人気のない公園に来ていた。当然、咲夜華の指定で。

「ごめん敏豪君！無理言って人気のない公園に来てもらったのに遅れちゃって！」

「別に待ってねーよ、俺も寝坊して家出るの遅れちゃったから。．．．そっちの女子が？」

「うん、アリアネルゼちゃん。私はアリアちゃんって呼んでるけど」

「．．．」

【初めまして、アリアネルゼ・トーレイアです】

何処からか取り出されたスケッチブックに敏豪は驚いていたが、しつかり読んで把握した。．．．名前を。

「．．．何故スケブ？」

【人と話すのが苦手で、恥ずかしくて、すぐ緊張しちゃうから】

「．．．っ」

．．．ああ、なるほどね、と心の中で理解した敏豪だった。

「．．．ところで、告白したい相手ってのは？」

【桐生君】

「．．．桐生？あれ？俺に思いっきり思い当たる節があるんだけど」

「．．．アリアちゃん、私にも思い当たる人が．．．」

【誰？】

顔を赤くしながらも、スケッチブック両手に首を傾げて聞くアリアネルゼ。そして、敏豪と咲夜華は同時に同じ人物を言った。

『桐生一樹』

「……………!!」

こくこくと頷いて肯定の意を示すアリアネルゼ。そして同時に溜息を吐いた敏豪と咲夜華。

【どうしたの?】

「ううん……大変な人に恋しちゃったなー……って……」

「……あいつ……極度の胸好きだから……なあ……」

「……?」

まったくわけが分からない、と言った感じで首をかしげるアリアネルゼ。

「私は今までよく奇行してるとこ見たから分かるけど……凄いよ、桐生君って……」

【海での事は見てたけど、それ以上なの?】

「……まあな。1-B変態集団の頭やってるし、部屋にエロ本はある……つか全て胸関連で……で、最後に……」

アリアネルゼは敏豪の言葉を待った。食い入るように。

「『死ぬ時は老衰かさつきゅんみたいなきよぬーっ娘の上で死にたい』 つつてたからな。．．．あ、さつきゅんってのはサキユバスのことな？どっかのSNSで出たやつだと思っけど．．．」

顔を赤くしたアリアネルゼ。

【私もおっぱいなら自信があるから】

「いや、そこは張り合っちゃいかんと思うぞ．．．」

「あ、でもアリアちゃんの話はホントだよ？今は抑えつけてるからそうは見えないけど、実際は凄いや？」

「．．．は？どういう．．．」

「結構大きいから。多分．．．桐生君の好みかも」

敏豪は何も言えなかつたりした。

「．．．とにかくだ、告白するなら．．．まずは手紙とかどうだ？」

【手紙？】

「自分が思った事を素直に書いて、アイツの家のポストかなんかに突っ込んでけばちったあ効果あるだろ？」

【そうかな】

何処かしら怯えのような感じで聞くアリアネルゼ。 顔が赤いのは「

愛敬。

【でも、アルバイトのついでに一緒に入れるのもあり、かな】

「アルバイト？」

【新聞配達やつてるの 私、貧乏で学費も免除してもらってるから
「じゃあそのついでに手紙突っ込んでみたら？」

【そうしてみる ダメだったらまたお願いしていい？】

「何度でも手伝ってやるよ、成功するまで」

「・・・あり・・・がと・・・」

アリアネルゼの口から出た感謝の言葉に、敏豪は目を丸くしていた。
あまりにも意外過ぎたからだ。

「・・・ま、まあ、頑張れ」

「・・・!!・・・!!」

盛大にかぶりを振って頷くアリアネルゼ。少し不安になる敏豪であった。

「……桐生君のお家は……」
「……」

アリアネルゼは一樹の家の前にいた。残っていたのは一樹の家の新聞のみ。

「新聞受けに・・・手紙も・・・一緒に・・・」

アリアネルゼは新聞受けに手紙も一緒に入れ、顔を赤くして帰路に着いた。

「気持ち・・・伝わるといいな・・・」

「まったく・・・お袋のヤロー人使い粗いんだから・・・おろ？手紙？なんで新聞受けなんかに？」

一樹は新聞受けに入れられた手紙を見つけ、宛先人を見た。そこには・・・

「『桐生 一樹君へ』・・・って俺宛？誰からだ？部屋戻ってみてみるか」

一樹は部屋に手紙を持って戻っていった。新聞はちゃんと母親に渡して。

「……で、差出人が分からない封筒、と。可愛らしい柄なんだけ
ど」

封筒を破り、中の手紙を取り出し、読み始めた。そこには……

【突然のお手紙で驚かせてしまい、申し訳ありません】

の出だしで書かれた文が。

「……これ……え、マジで!? うっそ、ついに!? 俺に春が!
? って出したの……うおおっ!? これは夢!? 夢なのか! ?」

「……うー……ん……」

朝7時ごろ。敏豪の携帯に電話が鳴った。

「……一樹……？なんなんだよ朝つばらから……」

『敏豪、聞いてくれ！俺……俺告白されたんだけど……！つか完全

じゃないからお呼び出し！！まさか西条東おっぱいランキング1位のトーラレイアから告白されるなんて思わなかった！！」

「・・・なに？何ランキング？」

「まともないいかたすりゃ西条東バストサイズランキング！誰がまとめたか知らん西条東の女子のバストサイズのランキングだよ！！男子にとっちゃ夢をまとめたランキング！その1位のトーラレイアから告白されるって・・・俺幸せ過ぎんぜ！？」

「あっそ」

「まーお前には3位の音羽とか推定16位のリーアフォルテに30位のヴェイルフォルがいるしな、興味無いんだろ？」

「それ抜きでもどうでもいい」

バツサリと切り捨てた敏豪だった。強いて言うならば、ランキングすらどうでもよかったり。

「まーとにかく行ってやれよ、来て欲しいって言ってんだろ？」

『当然行く！行くっきゃねーだろ！！よし、マシな服着てくぞー』

「！！」

そして、ブツンと切られた電話。

「・・・大丈夫かな・・・トーラレイアのやつ」

「ちょっとばかり早く着いちゃった。でも・・・やべえ、にやけ顔が消えねえ」

一樹はアリアネルゼから指示された公園に既にいた。時間は2時50分。来て欲しいと言われたのは3時。明らかに気持ち先行していた。

「早く来ないかなー・・・そだ、近くをぐるっと歩いてよ。少しは時間つぶせるかも」

一樹は近くを歩き始めた。・・・とはいえ、足取りは非常に軽く、浮かれているのが誰の目にも分かった。

「・・・な、なあ咲夜華・・・」

「どうしたの、敏豪君？」

「・・・何で俺達、こんな覗きみたいなことしてんだ・・・？」

敏豪と咲夜華は一樹をこっそりつけ回し（一樹は一切気付かなかった）、告白会場を突きとめて、絶対に見えない位置から覗くようにしていた。

「だって心配だもん、アリアちゃん、すごい恥ずかしがりだから

逃げだしたりしちゃうないかが・・・」

「でも決意したんだろ？だったら信じてやらねーと」

「でも・・・」

お前はトーラレイアの母親か、と心の中で突っ込む敏豪だった。なお、アリアネルゼにはこのことを一切伝えていない。

「・・・あ、桐生君が戻ってきた」

「時間は・・・2時58分、時間的には問題ないな・・・お、トーラレイアも来たみたいだ」

奥の方からとてと歩いてきたアリアネルゼ。ちよつと急ぎ足なのは、どうもおめかしで時間がかかったためだ、と敏豪は思った。

「あ、あの……き、き、桐生君……です……か……？」
「ん？」

後ろを振り向く一樹。後ろにいるのは当然アリアネルゼ。

「は、は、はじめ、まして……あ、アリアネルゼ・トーラレイア・
……です……」
「え、と……こちらこそ初めまして……？桐生一樹です」

お互いにぎこちない挨拶をする二人。遠くでは敏豪が『一樹があんなんなるとか珍しいな』と言っていた。

「あ、あの、お、お手紙、見て、来てくれた、んですね？」

「あ、ああ。ラブレターは初めてもらったから・・・浮かれてて」
「そ、その、お手紙じゃ、えと、き、気持ちが伝わらないと思って・・・だ、だから、だから・・・」

一拍置いて、大きく息を吸って、アリアネルゼは言った。

「あ、改めて、私の告白、聞いてください！わ、私は、貴方のことが大好きです！ずっと想ってました！っ、付き合ってくださいませんか！？」

大声での告白。アリアネルゼからすれば今まで出した事のない大声だった。ちなみに隠れていた咲夜華は驚いていた。

「・・・名前で呼ぶの面倒だし、アリアって呼んでいいか？」
「・・・ふえ？」

アリアネルゼは一樹の声に上を向いた。その瞬間だった。

「ひゃうっ！？」

一樹に抱き締められ、上ずった声を上げる。

「寧ろ俺からお願ひしたい！俺と付き合つてくれ、アリアー！」
「……はい……！はい……！」

「・・・おめでと、アリアちゃん」
「これで、俺達もお役御免、かな？」
「だね」

敏豪と咲夜華はこっそりと茂みから出て、帰路につく。

「あ、そうだ敏豪君」
「なんだよ咲夜k・・・ちょ、何抱きついてきてんだ!？」
「このままデートしようよ!リーアフォルテさんもないし、二人きりだから、ね？」
「俺としてはもう帰りたいんだけど・・・ここで音羽に見つかったらまた何されるかわかんねーし・・・」
「いーの!というか敏豪君は私ばかり見てればいいの!」
「・・・なんという独占欲の塊・・・」

敏豪ががくんとうなだれた時。

「・・・あ、あのね、敏豪君・・・」

「今度はなんだよ」
「血、吸わせて？」

今ここですか、と思い、焦る敏豪。

「あのな？いきなり言われても俺の心の準備が出来てねーんだけど
？それにここ人目につきやすいと思うけど？」

「でも・・・もう・・・我慢できないもん・・・」

「だから我慢しろっせ」「いただきまーす！」だから我慢しろってー
！！」

結局敏豪は咲夜華に血を吸われる羽目になった・・・

そのにじゅうよんっ！　なんてこった！？まさか『アイツ』に恋人が！？（後書）
次回もキャラが増えます。やっちなまおい、みたいな気分で
お待ちください。

後、増えるキャラに珍しく男性キャラが。・・・とはいえ彼もモブ
です。はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8224x/>

恋する乙女は悪魔っ子！？

2012年1月14日03時45分発行